
夢の吊り橋

西山 正義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の吊り橋

【Nコード】

N4655W

【作者名】

西山 正義

【あらすじ】

日曜日だというのに、いつもの出勤時間より早く家を出た。師走に入ってからさすがに寒くなってきた。僕は、長年愛用して擦り切れだらけになった革のジャンパーを着込み、足早に駅へ向かった。……そしてそこから、十二年前、二十歳前に死んだ友人の死の謎を探る旅の回想へと誘われ……

【初出】 『日&月』 第三号・平成9年3月

【再録】 『西向の山』 平成14年4月

(前編)

夢の吊り橋 (前編)

西山 正義

日曜日だというのに、いつもの出勤時間より早く家を出た。師走に入ってさすがに寒くなってきた。僕は、長年愛用して擦り切れだらけになった革のジャンパーを着込み、足早に駅へ向かった。

電車は空いていた。平日とは明らかに客層が違う。何も考えがまとまらぬうちに、終点のターミナル駅に着く。新宿だ。待ち合わせの時間にはまだ充分間がある。とりあえず集合場所に行ってみる。まだ誰も来ていない。日曜の朝の新宿は汚い。空気がさついている。絞ったままの雑巾がそのまま乾いて打ち捨てられたような風情だ。

低血圧で寝起きの悪い僕は、いつも朝食はほとんど食べない。胸焼けがして朝は何も食べられないのだが、きょうはこれから長い時間バスに揺られることになるので、軽く腹ごしらえしておこうと、ファーストフードの店に入った。ハンバーガーとホットコーヒーを買って店から出てくると、ちょうど厨房屋さんの社長が通りかかる。僕に気づくと、恰幅のいい体躯を揺すって、いつもの人懐こい笑顔を振りまきながら、二、三步戻ってくる。

「よう、おはよう」

「おはようございます」

「早いじゃないか。お、なんだ、朝飯か」

「ええ、まあ」

「おれも食ってないんだよな。あとで幹事に買ってこさせよう。…お、奴らも来てるな」

見ると横断歩道の向こうに何人が集まっていた。厨房屋のオヤジはおーいと手を振り、「みんな相変わらず馬鹿面さげてるな」と舌を出す。

「それにしても、きょうは寒いなア」

「ええ、冷え込みますねエ」と僕も調子を合わせる。

まだマイクロバスは到着していなかった。ひととおり挨拶を済ませ、朽ちかけた屋台の上にホットコーヒーのカップを置き、砂糖とミルクを入れ、ハンバーガーをぱくつく。

バスが来た。マイクロバスをチャーターしたとは聞いていたが、まさか電気屋さんの社長が運転してくるとは思わなかった。

「やあ、どうも。定刻ぴつたりだろう」

「なんだア、野田さんが運転していくのオ。大丈夫かあ」空調屋さんの工事主任が叫んだ。そのすつとんきよな声は閑散としたビル街にこだまするほどだった。

「野田さんには、折角の忘年会旅行だというのに、たいへんご足労おかけしますが、何分にも予算の都合で……、なにはともあれ、二日間よろしく願います」幹事を務める内装屋さんの専務が言った。「はい、では揃ってる人からどんどん乗ってください。置いていかれても知りませんよ」

僕は後ろから二番目の目立たない席に座った。騒がしい人たちはどうやら前の方に陣取ったようだ。隣はおとなしい空調屋さんの部長だ。幹事役の斎藤君と鳥越さんがビールとつまみを配る。

「朝メシ食ってない人は、おにぎりもあるよ」

それならそうと先に言ってくれよ、と僕は思った。ハンバーガーなんか食うんじゃないや。胸につかえる。

車が動き出す。いささかきこちなく、そろそろと。二速から三速へスムーズに入らない。

「おい、いきなりエンストしたなんて言うんじゃないだろうなア」空調屋さんがまた怒鳴る。

「ばかやろう。こちとらダテに戦車部隊で鳴らしたわけじゃないん

だぞ」

ほんとかよと僕は思ったが、あながち嘘でもないらしい。さあ、出発だ。もう眠くなってきた。斎藤君がマイクを取る。

「ゴホン、本日は皆さん、えー、たいへんお忙しいところ多数お集まりいただきまして、誠にありがとうございます」慣れない台詞を照れたように言う。「まじめにやれー」と野次が飛ぶ。「えー、まあ、今年一年の疲れを忘れて、きょうあすと二日間、大いに盛り上がりましょう。それで……、残念ながら、と言うか、まあ、予定通りなのですが、主賓は来ませんので、気楽に無礼講でいきましょう。ご覧のとおり、諸般の事情で、野田さんには申し訳ありませんが、運転手になっていただきました。よろしくお願いします」
「おれはこんなオヤジとなんか死にたかないぞオ」建具屋さんがすかさず野次る。

新宿の南口から代々木方面へ抜けて行ったのまでは覚えているが、もうどこをどう走っているのか分からなかった。というより、どこを走っていようがどうでもよかった。どこのランプからのろうが、首都高三号線から東名高速に入る筈であった。前の晩夜更ししたので、酒盛りに巻き込まれる前に眠ってしまいたかった。

いろいろな業者が集まった一行十八名は、これから静岡県奥地、南アルプスの表登山口にあたる寸又峡温泉へ向かう。一行は、ある宅配ピザ・チエーンの新装工事業者の寄り合いで、現場の総監督である内装工事屋を中心に、その下請けの各業者と、厨房設備屋、空調と吸排気の設備業者、そして店舗内外のサインを受け持つ看板屋の各担当者。ほとんどが職人さんだ。僕は看板屋の営業マンとして来ている。昨年は、ピザ屋も不景気らしく夏以降出店がなかったの で、二年振りの忘年会旅行となる。

この種の旅行はあまり気乗りしないものだが、お客さんを接待するためのものではなく、いずれ気心の知れた業者同士の集まりなので、気は楽だった。ところが、その行き先が、よりによって寸又峡

だとは。急遽計画されたこの旅行。最初、行き先を聞いた時、僕は不意を突かれ、僕の心はおおいに騒いだ。

忘れていたわけではない。いや、忘れるわけがない。だが、今年があれから十二年目の節目の年だったとは、旅行の幹事から「寸又峡」という地名を聞かされるまで、正直言っただけ全く意識していなかった。

その 事件 とそれに引き続くいくつかのエピソードは、当事者でも身内でもない僕にとっても忘れられない出来事であった。しかし、その 事件 がその後の僕の《人生》や生き方に大きな影響を与えたかという点、残念ながら（といってもいいだろう）、そのようなことはなく、今では、《青春》（そう、まさに青春！）のほろ苦い思い出として、微笑をもって迎えられるものだと思っていた。ところが、久し振りに「寸又峡」という地名を耳にし、十二年振りに訪れることになった今、果たしてそれだけのことだったのかという思いがふつふつと湧き上がってくると同時に、仕事をしていてもその頃の記憶が鮮明に蘇ってくるのを抑えることが出来なくなっていた。

久坂政道という友人が死んで十二年。つまり今年は十三回忌だったのだ。

自殺だった。投身自殺というのか入水自殺というのか。いや、あるいは本当は事故だったのかも知れないが、いずれにしろ、久坂政道は、十二年前の六月のある日、寸又峡の大間川に懸かる「夢の吊り橋」という名の吊り橋から転落して、十九歳でこの世を去った。その後、僕はある事情によって、彼の死までの道のりを辿ることになるのだが、結局最後まで真相は判らなかつたし、そういう事実があったという現実の前ではすべてが徒勞だった。状況は揃っていた。しかし事故という線も考えられた。ただ僕個人にとっては、状況だけで充分だったし、ああ、彼は自殺したのだな、と何の抵抗もなくはじめから了解していた。彼なら当然そうなるだろうなとも思っていた。生きていれば、ただそれだけでいいのか、というのが当時の

僕の、あるいは僕たちの、基本的な物の考え方であった。しかし、その頃はすでに 自殺 というものにかつてほどの興味がなかったこともあり、何よりも自分たちの事に忙しかつたので、彼の死をそれ以上詮索するつもりはなかったし、その後も時折思い出すことはあっても、直接自分自身のこととして関わってくるようなこともなかったのに……。

*

久坂政道と僕は、S学院中学からの同級生で、高校までの六年間ずっとクラスも一緒だった。僕らが入学した学校は、お洒落な若者の街として当時脚光を集めはじめていた東京のM市の繁華街を抜けた所にあり、幼稚園から大学まで併設された、いわゆる私立のお坊ちやま・お嬢ちやま学校で、中学と高校は男女別学だった。この手の学校は都内にはいくつもあるが、お坊ちゃん学校といつても「超」が付くほどのエグゼクティブはいないところに特徴があった。中学受験のレベルでいえば、中の上といったところで、一貫教育を旨としていたので当然のことながら進学校ではない。在学中は保守的な学校だと反発していたし、行儀や風紀にはやはり厳しかったが、その後予備校で知り合うことになる武田行雄などが通っていた、同じ東京の多摩地区にあるL学園ほどではなかったようだ。いずれにしてものんびりした学校で、生徒たちも東京郊外の典型的な《中流》家庭の出で固められていて、いい意味でも悪い意味でも平均的だったので、たいした波風も立たず、風紀には厳しかったが、世間の厳しさからは隔離されているような学校だった。

それはそれとして、何かしら琴線に引っ掛かるものがあって、自分にとって気になる存在の同級生というのが一人や二人いるものだ。皆いろいろな小学校からそれなりの受験勉強を経て集まって来たので、それぞれに気にはなっていたが、なかでも僕が最もその存在を意識していたのが久坂政弘であり、北原広志であった。もちろん

ん他にも気になる奴はいた。僕は足の速さと球技には自信があったので、それは時には運動面でのライバルだったりするのだが、彼らに共通していえるのは、自分に無いものを持っていたという点である。ところが、その無いものが安心して甘んじていられるような種類のものである場合は、普通に付き合うことが出来たし、（もつとも、僕は端から見て無口で取っつきにくいという印象を与える上に、かなり人見知りする質だったので、いささかきこちなくではあったが……）、必要以上に相手を意識することはなかった。

しかし、久坂と北原は違った。この二人に特別な感情を抱いていたのは、たぶん自分と同じ種類の人種であるということと直観的に嗅ぎつけていたからであり、さらに、自分より一歩前を行っているというような劣等感と、憧れの裏返しのようなある種の嫉妬心をかき立てられていたからであろう。それ故に、僕の価値観や世界観に大きな影響を与え、三十歳を越えた現在でも変わらずに付き合いのある北原広志とも、中学二年の夏頃まではあまり接することはなかった。北原とは、中二の夏、自由参加の林間学校で少し話をしたのをきっかけに急速に親しくなり、高校でクラスが別になってからもお互いの教室を行き来したりしていたのだが、久坂政道とは、高校でも同じクラスになったにもかかわらず、最後まで親しく付き合い合うことなく終わってしまった。

僕がS学院中学に入学して最初に仲良くなったのは、本人はそういうつもりはないのだが何となく剽軽で、ほのぼのとした性格の成田倫太郎という友人だった。彼とは要するに馬が合うというやつで、最初から意気投合し、いつも一緒にいて苦にならず、僕にとっては心地好い風のような存在だった。そこに居るだけで周りの人間を明るくしてしまうところが彼にはあった。北原と二人きりだと、いつも緊迫していて、時々息が詰まることがある。そこに成田倫太郎がいるだけで、空気がなごみ、収まりが良くなる。だから少なくとも高校時代までは、僕と北原の間には無くてはならない貴重な友人だった。面白いことに、久坂政道が一番親しく付き合いしていたのも成

田倫太郎であり、僕と久坂、あるいは北原と久坂は、成田を通じて親しくなってもよさそうなものなのに、ついにそうはならなかったのだ。

ところで、このように同性の友人に対する特殊な思い入れが芽生えるのには訳がある。僕らの学校は純然たる男子校ではなかったが、男女別学で、女子部の校舎は大学のキャンパスを挟んだ反対側であり、普段女生徒と接することはなかった。もし同じ教室内に女の子がいたならば、事情は変わっていただろう。意識の半分（いやそれ以上かな）はそちらに向いていた筈だ。男女共学に比べて、同級生あるいは上級生や下級生に対する同性愛めいた感情が芽生える確率が高い。僕にもそのような経験がないわけではない。もっとも、例えば戦前の旧制高等学校の寄宿舎生活の中から生まれてくるような同性愛にはほど遠い淡いものであって、それが本格的な同性愛に発展することはまずなかったが……。共学がいいか、別学がいいか。それは一概には言えない。異性に対する幻想が必要以上に増幅されるという良くない傾向はあるが、男子校や女子校には、遠慮がなくていいという面もある。いずれにしろ異性への興味は肥大していく年頃であるが、それがどんなに頭の中で渦巻こうとも、日々の教室内では異性に煩わされることなく、他の事（あえて勉強とは言わない）に意識を集中することが出来た。もちろん、最初から女の子を意識していたグループもいた。校舎は離れていても通学路は一緒だし、小学校から上がってきた連中には、当然のことながら女子部にかつてのクラスメイトがいたのだから。それに何といても、僕らの学校がある街には若い女性が犇めいていたのだから。しかし、僕も北原も成田も、そしておそらく久坂も、少なくとも高校三年になるまではそういうこととは無縁だった。いま思えば何という勿体ないことをしていたのかと思うが、お蔭でたくさん本が読めたとし、北原と成田の三人でささやかにやっていたバンド活動も、女の子の目を気にすることなく自由な発想でやれたのだった。

久坂政道はなかなか成績優秀な生徒で、北原広志などと並んで常

に上位にいた。実は僕も最初はそうだったのだ。北原がある先生から伝え聞いた話によると、入学試験の席次は、北原が四番で、久坂が六番だったらしい。そして何と僕が二番だったらしいのだ。おそらくこれはあくまでも実際に入学した生徒の順位であって、もっと優秀なのはいくらもいたのだろうが、その話を聞いて、入学早々の中間テストのあと担任に言われた、「君はもつと出来ると思っていただのだが……」という言葉が納得できた。というのは、僕は小学校の終わり頃から欧米のポップ・ミュージックに魅せられていて、それがロックやフォークと本格的に出会うことによってその熱はさらに嵩じてきて、単なる《ファッション》としてではなく、ロックやフォークから精神的な影響をもろに受けていたので、学校の勉強には全く興味が失せてしまい、受験までして入った学校に対する失望も手伝つて、成績は目に見えて落ちていった。最初の試験はそれでモクラスで五番だったが、一学期末には早くも十二番に落ち、二学期以降は二十位代、つまり中の中か、中の下のあたりをうろろろして、卒業まで上がることはなかった。久坂や北原も同様に音楽や文学から相当影響を受けていた筈なのだが、彼らは僕よりも屈折した精神の持ち主だったためか、ポーズが上手かったのか、授業中だけは真面目にしていたのかは判らないが、二人はいつも上位の成績をキープしていた。

ところが、高校に上がりクラスが二倍に増えると、北原は相変わらずだったが、僕と久坂の成績は逆転していた。中学時代学業ではあまり目立たなかった生徒が、高校になって急に延びてくるという例はいくらでもあった。それは中学受験よりもシンドイ高校受験を経てきた公立の中学出身者が大勢入って来たせいもある。彼らの方が当然の如く最初は優秀なのだ。ところが彼らも三年間のうちに慣らされてしまい、大学で同じ思いをすることになる。付属校の宿命である。久坂政道はしかし、成績が落ちただけでなく、高校一年の終わり頃から欠席がちになり、二年生の一学期には学校そのものに来なくなってしまう。僕らの学校のようなところにも、多

かれ少なかれイジメはあった。しかし彼に対してそのようなことはなかったと思う。また、複雑な家庭の事情があったというようなことも聞かない。精神面だけでなく、肉体的にも何か変調があったらしいのだが、その頃になると僕はもう以前のように久坂を特別に意識することはなくなっていたし、たまたま僕のクラスには他にも二、三登校拒否気味の生徒がいたり、他校の生徒と問題を起こすのがいたりで、彼の不在は全く目立たなかったこともあり、僕もそれほど気にはしていなかったのだ。今にして思えば、それが大きな間違いだったのかも知れない。

一度だけ、担任の先生から久坂のことを言われたことがあった。それは、何かの用事のついでに何気ない風を装って言われたのであったが、わざわざ僕を指名したのは、僕を見込んでのことだったのだろう。「ところで、久坂君のことな、どうも身体の調子が悪いらしいんだが、ときどき気をつけてやってくれないか」と。その先生は、今年定年退職したということなので、当時すでに五十代なかば、二松学舎大出の、古典と漢文を教えるいかにも老練な先生で、当ても短歌を詠んだりしていたが、若い頃は同人雑誌で評論や小説なども書いていたらしい。そんな文学青年が年取ってある種の境地に達したというような先生だったので、僕や久坂みたいな文学青年タイプの気難しい生徒の心情を理解していたのだろう。

不良でも劣等生でもなく、非行に走ったりもしない、成績は優秀で、だからと言って、決して優等生とはいえない生徒。教師や学校、ひいては大人の社会に対する反抗を、解かりやすい形で表に出さないうで、だが充分に辛辣で反抗的な生徒というのは、教師にとって最も扱いにくい筈なのだ。その先生はしかし、多くを語らずにそれらを見守っているという感があつて、僕は、中学の時の担任のようには蔑んではいなかったし、ある程度敬意を払っていた。しかしその反面、不気味でもあり、疎ましくも思っていた。大人は判ってくれない、もつと理解して欲しい、と思うと同時に、大人なんかを理解されてたまるか、という心情が入り乱れている。これは大昔も今も

変わらない《思春期》に共通する心情だろう。要するに素直になれないのだ。その先生は、僕が一年生だった時、昨今の高校生ではあまり読まないような文学作品を僕が読んでいるのを見ていて、ある日職員室に呼出し、「こういつの読んだことありますか？ もしよかつたら持つていってください」と言つて、わざわざ家から持つてきたらしい数冊のぶ厚い蔵書を示した。「もう読んでしまったので、おそらくこれから先、そう長くはないので、ぼくはもう読めないだろうから」と。その時抱えて持ち帰った先生の年季の入った蔵書は、その後読んだものもあれば読まず終いのものもあるが、実はいまだに返していないし、たいした礼も述べずその感想を語ったこともない。もし大学でこの先生に出会っていたら、いろいろ話が出来たのになあと、今では残念に思っている。

そんな先生だったから、久坂政道の内面の問題にはあえて触れなかった。そしてそれ以上そのことについては何も言わなかったが、僕はすぐに、先生が何を言いたいのか理解出来た。そしてそれに関しては素直に頷くことも出来た。にもかかわらず、僕は何も出来なかった。いや、正確に言うなら、何もしなかったと言う方が正しい。もっとも、僕なんか余計な気をまわしたり、好奇心から近づきうなことがあれば、彼にとっても迷惑なことだったろう。だが、僕は何らかの鍵を握っていた筈なのだ。久坂が唯一親しくしていた成田倫太郎とは別な意味で。慢性的な神経衰弱とも、不安神経症からくるノイローゼとも、自閉症とも、鬱病とも予測された久坂を、僕は結局、他のクラスメイトと同じくただ遠巻きに見ているだけだった。

成田倫太郎に、久坂は一体どうなっちゃったんだと訊くと、彼にもその実情はよく判らないらしかった。倫太郎と一緒にいる時は、以前とそれほど変わった様子はないというのだ。（久坂と成田は帰る方向が同じで、久坂がたまに登校してきた時などは、成田が付き添うように一緒に下校していた）。気質的には僕以上に久坂に近かった北原広志も、やはり彼のことは気に掛けていた。しかし北原も、

何のリアクションも起こさなかった。起こしたところで、それはもちろん本質的には、どんな友人でも手を差し延べられないような問題なのであった。それはそうに違いない。でも、本当にそうだったのか？ と今にして思えば思えてくる。やはり孤独だったのではないか？ 孤独の深淵が口を開けていたのではないか？ 例えば僕も北原も孤独を愛していたが、一方では心の通う友人がいて、いい意味で気持ちを引っ張られていたところがある。それをも拒絶していたというのか？ そう見えていた、あるいはそう見せ掛けていただけではないのか、と。

それでもともかく、久坂政道は、二年の終わりには出席日数の帳尻を合わせ、三年に進級した。高校最後の年になると、大学進学に備え、また一部他大学を受験する者のために、主要な学科でコース別に教室が分かれる。久坂と成田は上の大学の文系に進む普通のコースに入り、北原や僕は一応文系の進学コースに席を置き、さらに共通一次試験（懐かしい言葉だ）にも対応できるように物理などの補講にも出ていた。したがって、久坂と顔を合わせるのは体育やホームルーム（これも懐かしい言葉だ。感覚的にはほとんど忘却の彼方にあるような言葉だ）の時間くらいなものになってしまい、そもそもきょう彼が出席しているのか欠席しているのかも、特に注意することもなくなってしまった。

その頃まで僕は、久坂とは別の意味で、《ドロップ・アウト》（この言葉に僕をどれだけ参っていたことか。一種のお呪いだつた。・）（）することばかり考えていて、実際にそれが難しいなら、留学試験を受けてニューヨークの大学に行こうと本気で思っていた時期があった。ニューヨークというのは、要するにグリニッチ・ヴィレッジに行きたいがためなのだが、実際に英検の二級を受けたり、英会話を勉強したりして、それなりの準備はしていたのだつた。ところが、前年の暮れに、ジョン・レノンが撃たれ、その最大の目的が失われてしまった。そしてその直後、僕は百八十度方向転回し、「新右翼」と呼ばれるある団体にのめり込んでいくのだつたが、そこで

出会った大学生や元学生であるところの社会人などの影響と、憲法改正のためにはまず憲法を勉強しなければならぬということ、共通一次用の補講からは早くに脱落してしまっていたが、私大の法学部に絞り、遅まきながら受験勉強を始めたのが夏頃からだった。

そんな折、久坂政道も密かに受験勉強をしていて、日大の芸術学部の放送学科かなにかを狙っているらしいという話が伝わってきた。それを聞いて僕はほっとしたのだった。彼もふつうに受験し、ふつうの大学生になる。ほとんど憎しみをもってしか「ふつう」という言葉を思い起こせなかった僕ではあるが、その時はこれでいいのだと思った。彼も恢復（何からの？）という疑問は残っているし、それが恢復といえるのかどうかは判らない。もつと言え、それがいい事なのか悪い事なのか判らなかつたが、とにかく《ふつう》の意味で恢復に向かっているのだと思った。

常に成績の良かった北原は別にして、ドロップ・アウト指向のうえ、学生運動まがいの事までやっていたいい時と悪い時の差が激しかった僕も、生徒会の役員をやったり学外でもボランティア活動などをしている学業の方は芳しくなかつた成田も、そして久坂政道も、とりあえず高校を卒業し、大学に進んだ。

結局、久坂は、他大学を受験しないで、内部推薦によってそのままS大の経済学部に入學した。経済学部というのは意外であったが、彼にはむしろその方がいいかも知れないと思えた。北原広志は、当初から、国立が駄目だったらS大に上がると決めていたようで、共通一次の結果、大学別の二次試験は受けずに、すんなりS大の文学部国文科に進み、成田倫太郎は、実家がお寺でもないのに、中学の頃からおれは坊主になると言っていて、はじめは冗談かと思っていたら、本当に大正大の仏教学部に入ってしまった。そして僕は、大衆学を選ぶ段になって、学部や学科よりもある大学の名前に固執するようになり、ほかを受けずに一年浪人した。だが、最初から一浪だけと決めていたので、結局その大学は受からなかつたが、翌年、法政の法学部政治学科に入學した。

久坂政道とは高校を卒業して以来一度も会っていないかった。昔なら稚児さん関係などと言われていたであろうほど、中学時代はいつも御神酒徳利のようにつるんでいた倫太郎とも、その頃から疎遠になりつつあった。逆に北原とは、それまでの付き合い方とはまた異なる、新たな付き合いが展開され始めていた。それまでは、書いたものを交換したりというようなことはあっても、ギターの音を合わせることによって無言のうちにコミュニケーションが量れていたのだ、ほとんど会話らしい会話をしたという記憶がないのだが、楽器をいじらなくなった代わりに、直接会話（議論といってもいい）をするようになった。お互い《成長》したということもあるだろうが、もっともそれは《青年》になったということを指すのであって、《大人》になったということではないのだが、高校二年の終わり頃から浪人中にかけて思想的な体験をしたことにより、僕もそれまでの感覚的な物言いから、論理的な物言いに変わってきたのだ。その北原から、学部が違うのでたまにしか会うことはないが、久坂も元気に学校に来ているということを知って安心していた。だから、高校卒業二年目に、あのような事になるうとは思ってもみなかった。

……

*

僕らに乗せたマイクロバスは、海老名のサービス・エリアに入った。ここまで特に渋滞もなく走ってきた。バスの中ですぐにも宴会が始まるものと思っていたのだが、大型の観光バスとは違い、座席が相当に窮屈なのと、ガイドさんがいるわけでもないのが、女気がまるでなく、このメンバーにしては静かな旅行になった。運転手への配慮もあったのだろう、めいめい罐ビールを二、三本空ける程度でここまで来た。

サービス・エリアに降り立つと、まずみんなトイレに行く。それから売店を覗く。そしてすかさずソバをかき込む者がいる。また、

必ず何か買ってくる者がいて、屋外のベンチに腰掛けて煙草をふかしていた僕も、御手洗団子のご相伴にあずかる。もう十二月に入っているので、小春日和とは言えないが、空は晴れ渡り清々しかった。まさにフジヤマという具合に富士山が聳えている。

海老名S A。そうだ、十二年前のちょうど今頃、先に着いた僕と北原広志は、財津美耶子を乗せてやって来る成田倫太郎のスバル・レオーネを待つていたのだった。

しかしここも大々的な改修工事が行われ、すっかり様変わりしてしまった。トイレの外壁に掛かっている大きな看板を、つい先頃会社を飛び出していった常務が手掛けていた頃は、うちの会社も少しは景気が良かったのだ。それは内部の照明がいろいろな色に変化するものだった。その看板を見ると、十二年前の事ではなく、二年前の会社の旅行が思い出されてきた。

それはさながら最期の晩餐のような旅行だった。給料の遅配が始まり、ボーナスなど望むべくもなく、その社員旅行を境に、一種の流行となっていたリストラと称して、何人も社員が辞めさせられていった。今にして思えば、頭の悪い経営者ばかりが集まった、そして従業員も似たり寄つたりの、こんな碌でもない会社はさつさと辞めた方が正解だったのだ。会社だけの問題ではなく業界自体のレベルが低すぎる。まあもつとも、いい加減な会社だから、こんな僕でも営業マンとして一応勤まっっているのだが……。それはともかく、その頃いた事務員の一人に、僕は仄かな好意を寄せていた。彼女は、もう一年半ほど前に、こんな会社いられませんかと言つて辞めていったのだが、僕よりちょうど十歳年下の彼女は、僕が今までに交際したり好きになった女性（そればかりか僕の生活半径にいたあらゆる女性）とは全くタイプの異なる「超」現代的な女の子で、大企業ならこの手の娘はいくらでもいたであろうが、うちのような会社には珍しかった。作業着姿の、それも年配の職人さんばかりが出入りする事務所に場違いな派手な格好をして、今時の女の子の特徴であるすらりと長い脚をよきによき出しながら事務所内を闊歩していた。

いま僕は、思わず撫でてみたくなるような彼女の腰まで伸ばした栗色の髪と、彼女がいつもつけていた香水の匂いを生々しく思い出していた。それは間違っても財津美耶子の面影ではない。しかしなぜか二人が重なって見えた。

「おい、おいてくぞ」という声で僕は我に返る。

バスはまた走り出す。

ディーゼル・エンジンの小気味良い振動に揺すられながら車窓を眺めていると、遠くの風景に再び久坂政道の肖像が立ち顕れてきた。

*

彼の尋常でない死を知ったのが、その直後であったなら、やはりそれなりの衝撃を受けていたであろう。しかし僕も北原も、実際にはそれほど親しくなかったので、人伝にその噂を聞いたのはもう一ト月以上もあとになってからだった。したがって葬儀にも出席していないし、その後も彼の自宅にお線香をあげに行ったり墓参りに行ったりもしていない。だから、黒枠で縁取られた彼の写真を実際には目にしていないのだ。それである種の現実感がないのかも知れない。僕は（おそらく北原も）それを冷静に受け止めていた。いや、それを深刻に受け止めるには僕らの生命力の方が勝っていたともいえる。

その頃、僕らは充実した時間の中にいた。その年の春、めでたく大学に合格した僕は、本来ならある組織の正式な《同盟員》に昇格する筈であった。しかし、思想的な意見の食い違いや《運動》に対する基本的な考え方の相違もあったのだが、それよりも、前年の夏頃から幹部たちの人間性に疑問が生じるような出来事が相次ぎ、すでにその組織に嫌気が差していた僕は、同じ思っていた早稲田の先輩に大学合格の報告をしたその足で、二人で脱退届けを提出してきただった。その日は先輩の下宿に泊まり、脱退記念と合格祝いで一晩中語り明かした。明くる朝一度家に帰った僕は、夕方再び街に

出掛けて行き、それまでの自分と、自分の中に渦巻くいろいろなものを断ち切りたくて、生まれて初めて女を買った。（入学金を水増しして親に請求していたのだった）。それはともかく、入学までの数週間、差し当たって何もすることの無くなってしまった僕は、気が抜けてしまい、惚けたように過ごしていたのだが、入学式も直前に迫ったある日、浪人中に知り合った武田行雄が高校時代の友人とライブをやるということで、僕はそれを観に行った。

明治の文学部に入学することになっていた武田は、L学園で三人組のバンドを結成していた。武田の浪人が解けたということで、久し振りにライブをやるうというのだった。初めて聴く彼らの演奏に僕は最初から参ってしまった。定石を外れた武田のドラミングは個性的ではあるがさほど上手くはなかった。しかし、ギターの城山晃とベースの古川純一は抜群に上手かつたし、同人誌で知り合ったという武田の五歳年上の恋人である大沢真弓さんの弾く、レスリースピーカーを通した Hammond・オルガンは絶妙な味を出していた。城山のアンプは、僕が憧れていたローランドのジャズコーラスの最上級モデルで、ドラマーの武田がリード・ヴォーカルというのもユニークだった。何よりも僕を唸らせたのは、演奏もそうだが曲自体の素晴らしさだった。僕の全身に深く染み込んでくる、それら全曲オリジナルの楽曲は、三人が中学から高校にかけて書いたというもので、どの曲も複雑なコード進行で構成され、リズムも変拍子が多用されていた。僕が北原などとやっていたバンドとはレベルが違う。僕はすっかり打ちのめされてしまった。

しかしそれ以上に、その日は、僕らにとって新しいスタートの日になった。そのライブが行われた オアシス という会場は、元々ライブハウスではなく、普段は喫茶店なのだった。演奏が終わると機材が片づけられ通常の営業に戻る。僕らは一番大きなテーブルを占拠してひとまずシャンパンで乾杯し、バンドのメンバー以外は初対面だったので自己紹介をする。「俺、きのうで二十歳になったんだ」と武田行雄が言った。やはり十九と二十歳では大違いだ。同級

生の中で誕生日が一番早い彼に注目が集まる。そして「実は俺たち」と真弓さんを指し、「きのう結婚したんだ」と言つて、みんなを驚かせた。「市役所行つて、婚姻届けとやらを出しただけで、それでおしまい。呆気ないぐらい簡単だった。結婚式も披露宴もパーティーもやるつもりないから。夫婦でライブが出来たからもういいよ。まあそういうわけですので、よろしく」と言つと、武田は煙草の煙りを吐き出した。城山晃の音頭でもう一度乾杯する。「そんなことよ、ぼくらのライブどうでした？」と武田は僕に振つてきたので、ひとしきり音楽談義で盛り上がる。そして話は次第に別の方向に進んでいた。それがピークに達したのは、偶然その喫茶店に入つてきた北原広志と五島英二郎が加わつてからだった。オアシスはS大の通学路にあつたので、そんな大袈裟に言うほどの奇遇ではなかつた。だが、この二人が揃つたのには何か運命的なものが作用していたと思えないのだった。

真弓さんと、城山の彼女で、やはり三つ年上の安西佳子さん以外の七人はみな同級生であつた。しかし、古川純一と石井宏美がS大の同期で、北原と五島がS大の弓道部員である他は、大学はみな異なり、専攻は全員みごとにバラバラだった。古川は社会学科、石井宏美は心理学科、北原は国文で、五島は理工学部、城山は東洋大の哲学科、まだ入学前ではあるが武田が明大文芸、僕が法政の法学部という具合に。さらに、真弓さんは演劇を専攻する大学院生で、佳子さんはこの春女子大の国文科を卒業していたが、郷里に帰つてデザイン学校に再入学するところであつた。

で、僕らは、人間の社会性というようなことを話していた。コミユニケーションとは何か、またどうあるべきかというようなこと。自我とか愛とかそんな言葉が飛び交つていた。古川と宏美は大学のサークルの有り方に失望していた。北原と五島も大学で初めて運動部に入つた口で、やはりその有り方に疑問を持っていた。女子大の寮で苦い思いをしたことのある佳子さん、同人誌内の醜いごたごたに巻き込まれたことのある真弓さんや武田、つい数週間前にセク

ト を脱退してきたばかりの僕。僕らには、前の前の世代である団塊の世代や全共闘世代に対する批判があった。それと同時に、当時「新人類」という流行語を生み出した兄貴たちの世代にも反発があった。「私たちに出来ることはないかしら」と宏美は言い、「いや、複数形のわれわれというのじゃなくて、ひとりひとりが出来ること」と五島が言う。「やりたいことをやる時代はもう終わって、やるべきことをやる時期に来ているのではないか」と古川。そして僕らはひとりひとりの自主性と責任でもって運営し、サークルや《組織》というものの有り方自体を問い直しながら作るサークルを作ろうということと意見が纏まった。それは、インターサークルというようなものではなかった。アンチ・サークルと言えは言えるのだが、僕らはそう名乗ることはしなかった。なぜなら、アンチ・サークルと名乗った瞬間にアンチ・サークルというサークルになってしまうからだ。組織を否定した組織という矛盾にやはり無理があったことに僕らはのちに気づくことになるのだが、人間や社会の有り方を問うということは、とりもなおさず自分自身を問うということ、（古川は、社会学者の多くにはその点が欠如しているということを指摘し、文芸評論においても、自分を傷つけない批評はあり得ないと北原は言った）、サークル云々ということよりも、とどのつまり僕らは皆、おのおの自分自身の立つべき地平を求めているのだろう。具体的は何をするか。とにかくひとりひとりが メディア になり、かつアンテナになろうということ、だから僕らが最初にやったことは、それぞれの文章を持ち寄って雑誌を作ることだった。雑誌といっても、レポート用紙に書いた手書きの原稿をそのままコピーして綴じただけのものである。当初は雑誌の表題も会の名前も刷らないことにしていたのだが、それでは具合が悪いということになって、五島が何かの折りに言った「雑木林」という言葉をそのまま採用して表題にした。団体という概念を廃していたのでサークル名は付けなかったし、いわゆる同人雑誌というのでもなかった。北原の自宅に集まり、佳子さんと城山のイラストを配した表紙に、僕が

題字を書いたその第一号をホツチキスで綴じる作業が行われたのは、それから約二カ月後の一九八三年の六月十三日だった。

その日付を覚えているのは、製本の作業をしながら武田と北原が太宰治の話をしていて、「そういえば、ちようど今頃じゃなかったっけ？ 太宰が愛人と玉川上水に飛び込んだのは」と、その舞台の地元に住む城山が横から言ったのを、「そうだ、ちようどきようだよ。えーと、三十五年前のきようだ」と、武田が答えていたのが妙に印象に残っていたからであるが、久坂政道が「夢の吊り橋」から飛び込んだのはまさにその日だったのだ。

もちろん、僕も北原もそんなことは知る由もない。雑誌が出来、次に僕らは夏の合宿を計画していた。前期試験もおおかた終わた七月下旬のある日、その最終打ち合わせのためにS大の空き教室に集まっていた。そこで、たまたま通り掛かった中学のクラスメイトから、久坂の自殺を初めて知らされたのだった。その友人も詳しいことは知らなかった。もう一ト月以上も前の話だと言う。僕と北原は顔を見合わせた。そしてその瞬間にすべてを理解したと思った。だからそれ以上詮索するつもりはなかったし、深刻に考えることもなかった。成田倫太郎なら詳しい事情を知っていた筈である。しかし彼にその真偽を問い合わせることにしなかった。それよりも何よりも、自分たちが生きることには夢中だったのである。

ところが、その半月後、一本の電話から事態は変わった。ちようど、海水浴を兼ねて南房総で行われた『雑木林』の合宿から帰ってきた翌日、昼近くに起きた僕は、日焼けしすぎた軀をもてあましながらぼんやり蝉時雨に身を委ねていた。一種の虚脱状態にあった僕はまだ半分目覚めていなかった。そこへ突然電話が鳴った。家人は誰もいなかった。こんな時間に電話なんてきつとセールスか何かだろうと思つて、最初は出なかった。しかしあまりにも長くコールが続くので仕方なしに受話器を取った。

「はい、もしもし」と名を名乗らずに。

「あの一、内野さんのお宅でしょうか？ はじめまして、わたし、

財津美耶子と申しますが、大介さんはいらつしやいますでしょか」

それは全く聞き覚えのない女の子からの電話だった。新手的セー
ルスか、僕の名を語って軟派したやつでもいるのかと思って、（実
際そうということがあった）

「ご用件はなんでしょう」と僕は警戒して言った。

「大介さんならご存知かと思うのですが、S学院で一緒のクラスだ
った久坂政道さんの事で、ちよつとお聞きしたいことがありました
ものですから……、またお電話いたします」と、そのか細い声が緊
張のためか震えながら言った。

「あ、ちよつと待つて」電話が切れそうになつたので僕は慌てて言
つた。「ごめんなさい、ぼくが内野大介です。最近へんな電話が多
いものですから……。それで、今なんておっしゃいました。たしか
久坂政道つて言いましたよね。あなたは誰ですか？」

「あなたが内野さんですか、あーよかつた」とにわかにかに声の感じが
変わったが、すぐに沈鬱な声に戻つてこう言った。

「わたしは、おにいーちゃん、いえ、久坂さんとは家が隣で、妹の
ようなものです。一人っ子のわたしは、久坂さんを本当の兄のよう
に慕っていました」

「へえー、じゃあ幼馴染みというわけだ」

「ええ、残念ながら、それ以上でもそれ以下でもありませんでしたが。
……それで、このあいだ、あの人が、自殺したというのはご存知で
しょうか？」

「うん、知っているといえは知ってるんだけど、友だちから噂で聞
いただけで、詳しいことは何も知らないんだ。六月頃の話なんでし
よ」

「六月十三日でした」

最初に聞いた時は、その日にちに心当たりはなかった。彼の誕生
日はまだの筈であった。それよりも、どうやって、というのが僕の
最大の疑問であり、関心事であった。好奇の耳でそれを訊ねるわけ
にはいかない。しかし不謹慎にも、僕は内心わくわくしてくる気持

ちを抑えることが出来なかった。恋人というのではないにしろ、久坂に彼を慕うこんな彼女が存在していたのかという、新たな興味も含めて。

「静岡県に、寸又峡という温泉の涌く溪谷があるんですが、内野さんはご存知ですか？」

「いや、知らない。聞いたことないな。山梨の昇仙峡なら知ってるけど」

「そこに吊り橋があるんです。下は深い溪谷です。その先はダムになっっています」

そこで彼女は言葉を切った。何を言いたいのかおおよその見当はついたが、僕は彼女の次の言葉を待った。沈黙がやけに長いように感じられた。

「政道さんは、そこから飛び降りたんです。六月十三日の早朝でした。即死だったそうです」そこまで冷静に話していた彼女が、「でもね、可笑しいんですよ、その橋の名前。なんて云うと思います？」と急に明るい一オクターブ高い声になった。その声は笑っていた。しかしそれは涙声になるのを隠そうとして無理していることがありありと解かった。すでに嗚咽を含んだような笑い声だった。そして、「その橋、『夢の吊り橋』って云うんです」と言うと彼女はひやつくりをあげて泣き出してしまった。

僕はどう対処していいのか困った。確かに、彼女の言葉を聞いた瞬間は、僕も久坂を思っただけでやはり胸が詰まった。しかしそれと同時に、別の意味でやるせない気持ちになった。到底彼女と同じ痛みを分かち合うことは出来ないし、久坂の死を悲しむ気にはなれなかったからだ。

「ごめんなさい。取り乱してしまって」

「いや、それはいいんだけど、で、ぼくに電話してきたのは？」

僕は単刀直入に訊いた。

「それで、最初は本当にショックで、しばらくは立ち直れませんでした。（今だって立ち直ったとは言えませんが……）。内輪だけの

四十九日の法要も終わり、なるべく早く成仏させてやりたいというお母さんの意見で、納骨もその日のうちに済ませたんです。友人代表とついことで成田さん（知ってますよね）がいらっしやていました。お坊さんと一緒に成田さんもお経をあげてくれました……。政道さんのお部屋は今もそのままになっているんですが、その時、お母さんが、いつまでもこのままというわけにはいかないわね、少しは整理しないとねと言って、成田さんに、形見の整理をお願いしているのを聞いて、わたしがその役をかって出たんです。中学生ぐらいまでほとんどわが家同然に出入りしていましたので、勝手知ったるなんとやらで。小さい頃なんか、わざわざ隣に行つて、よく一緒にお風呂なんかにも入っていたんですよ。それでも……。やっぱり最初はなかなか手が付けられませんでした。何時間も座り込んでたばうとしていました。だって、その部屋には政道さんの匂いが染みついているんですもの。でも、どこを捜しても彼はいなくて……。真夏だというのに、主の居ない部屋はこんなにも寒いものかと思いました。それでも、ひよつとしたらひよっこり帰ってくるかも知れないと思うと、部屋は二階なんですけど、階段を昇ってくる足音にドキツとしたりして、でもそれはたいてい夏樹ちゃん（妹さんです）だったり、お母さんがわたしを心配して様子を見に来たのだったり……。それに、片付けはじめると、いろいろなものが出てきてしまうんです。わたしの思い出と重なるものもたくさんあって、そういうのを見ていると、また物思いに耽つてしまつて。エッチな本も出てきました。若い男性の部屋ですから当然ですよ。でもそんなものよりも、もつと内面的なもの、例えば日記だとかノートだとか、そういうものがたくさん出てきて、どうしてもそちらに目が向いてしまふんです。それは、いくら幼馴染みといえども、触れてはいけないものですよね。でも、どうしても触れずにはいられなかつたんです。それで、それらを繕っているうちに、ますます謎が深まっていってしまつたんです……」

「謎とは、自殺の動機ということ?」

「いえ、どう言ったらいいのかよく判りませんが、少し違うような気がします。政道さんはたしかに自殺しました。事故だと言って慰めてくれる人もいますが、あれはやはり自殺です。あの日は、太宰治が最期に本当に自殺した日でもあるんです。でも、そんなことはどうでもいいのです。自殺だろうと事故だろうと、わたしにとつては、おにーちゃんが死んでしまったということが問題なのですから。だから、どうして？ ということではないんです。ただ……、あの人に少しでも近づきたい、あの人のことを少しでも理解したいと思っっているんです。本当は、わたしにも何となく解かっているんです。でも、お友だちの意見というか、本当のところどうなのか、それが知りたいんです」

「ちよつと待つてよ。たしかに……クラスは六年間一緒だったけど、実のところ、ぼくはそんなに彼とは親しくなかつたんだ。そういうことなら、成田の方がよく判っているんじゃないかなあ」

「成田さんにもいろいろお訊きしました。学校ではどうだったのかとか。でも、そういうことではないんです。……実は、政道さんのノートの中から、内野さんや北原さんがお書きになった詞の写しがいくつか出てきたんです。それから、自分で作つたらしい曲に混じつて、内野さんたちがやつてらつしゃつたバンドの曲を、政道さんが勝手にアレンジして唄っているものなんかもカセットテープに録音されていました。もっとも、歌といつても、たいていはチューニングの狂つたギターを爪弾きながら、ほとんど呟いているようなものばかりで、とてもまともに聴けるようなものではないんですが……。そればかりか、あの人が最期に持つていたノートの中にも、それも死ぬ直前にメモしたと思われるところに、内野さんの文章らしい一節が書き留められていたんです。だから……」

「ちよつと待つた。どうして僕らのバンドの曲だつて分かつたの？」
「それは、内野さんのバンドのテープもあつたからです」

それはあり得ることだつた。小学生の頃から僕はよくカセットテープになんでもかんでも録音して遊んでいた。生録なんていう

ものが流行っていたりもした。中学でも北原や成田とそれで遊んでいた。それはバンドの演奏とは限らなかった。街の雑踏の音だとか、雨の音や虫の鳴き声だったり、授業中のお喋りをそのまま採ったものだったり。当初は演奏の方は目茶苦茶なものばかりだったが、中学の終わり頃からまともな曲を作るようになって、ちょうどその頃ステレオのラジカセが出たこともあり、ちゃんとしたデモ・テープを作ろうということになって、高校一年の夏から二年の秋にかけて休みの日はほとんど連日のように僕の家が集まっては録音していた。その中からベスト・テイクを集めて編集したテープを五、六本ダビングして友人に配っていたのである。そのようなテープはあつちこつちで流通していた。なかには、わざわざ各バンドの代表曲を一曲づつ編集して持っている奴までいた。同じようなことはおそらく日本中の高校で行われていたであろう。L学園の武田たちは、ライブ活動だけでなく、本格的にスタジオで4チャンネル・ミキサーを使って録音していたのだった。その時のマスターテープは北原が持っている。そのベーシック・トラックは僕が保管しているが、ダビングしたテープは手元に一本しか残っていない。だから廻り巡って久坂の手にあっても不思議ではない。あるいは成田が渡したのかも知れない。

「ということ、君、聴いたんだ」

「はい。聴かせていただきました」彼女は笑った。

「参ったなあ……。いやーお恥ずかしい。でも、久坂がそんなことしていたなんて。彼も何かやっているというのは知っていたけど、まさか僕らの曲をコピーしていたなんて、それは初耳だ。それに、僕の文章って、たしかにノートを廻したり、頼まれて歌詞を書いたりしたこともあったけど、でも、それが何で……」

僕は複雑な気持ちになった。それは、僕が何かしら彼に影響を与えていたということ、僕の虚栄心はおおいにくすぐられるものではあったが、そう言われても僕にはどうすることも出来ない。何とも厄介なことになってきたと思った。彼女はそのことで僕を糾弾し

ようとしているのか。そうは思えなかったが、それにしても一体、何が書かれてあったのか。しかし僕はそれをその場では訊けなかった。

「とにかく、電話じゃなんだね」

「そうですね。いろいろ見ていただきたいものもありますし」

彼女は今すぐにも会いたい風だったので、僕らは一時間後に待ち合わせすることにした。待ち合わせ場所を決めてしまつてから、僕ははたと気づいて、「ところで、君、もしかして高校生？」と訊いた。高校生の女の子を誘い出すことに何となく躊躇いを覚えたからだ。僕はそういうことに馴れていなかった。それに、彼女の落ち着いた受け答えや声の印象はとも高校生とは思えなかった。久坂をおにーちゃんと呼んでいるのだから年下には違いないのだろうか……。彼女はすかさず、

「いえ、高校は今年の春卒業しました。劇団に入つていてあまり学校へは行っていないんですけど、一応大の一年生です」と明るく答えた。

「何だ、じゃあ、同級生だ。僕は一浪したから」

僕はほつとして、「学部は？」とさらに訊ねた。

「文学部の哲学科です」

「あつそう。何となく解かるような気がする」と僕は言った。

何かトラブルが起こると、参つたなあと思ひながら、妙にわくわくしてくるもので、電話を切ると、僕はすぐに着替え、髭を剃り、髪を梳かし、オーデコロンをつけて出掛けた。駅で立喰いソバをかき込み、一服する間も惜しんで電車に飛び乗った。僕の方が先に着いた。ひと通り周りを見渡してそれを確認すると、ひと息ついて、煙草に火を点けた。罐コーヒーを買つてきて、ソバの後味を消す。そしてまた新しい煙草に火を点ける。かなり暑い日だったが、空気が乾いて気持ちのいい夏の昼下がり。アスファルトの路面を日光が焼いていた。

夏休みの繁華街は若い女の子で轟めいていた。その時になって、

目印になるものを何も決めていなかったことに気づいた。しかし、遠目にも彼女であることがすぐに分かった。彼女も迷わず僕の方へ向かって来た。膝下まである黒いワンピースを翻して小走りに駆けしてきた彼女。ウェーブした長い黒髪。靴もバッグも黒。全身黒尽くめの彼女は僕の想像以上だった。細身の身体。手足が長く見える。左手首に嵌めた金のブレスレットがワンポイントである。彼女は踵のないシューズを履いていた。近づくとなるほど長身であるのが分かる。美人に違いない。が、普通の女の子とは決定的に雰囲気が違う。彼女がどういう劇団に所属しているのか容易に想像出来た。

「はじめまして。すぐ分かったよ」と僕は言った。

「わたしも」と彼女が言った。

考えてみたら、僕も黒尽くめだったのだ。黒いシャツに黒のジーンズ。スニーカーも黒だった。僕は二人を見回して、「お互いカラスみたいだね」と言った。

とりあえず僕らは、静かに話の出来る喫茶店に入った。アイスコーヒーが運ばれてくるまでのあいだ、僕らはたいした会話を交わさなかった。一瞬僕は何のためにここへ来たのか忘れてしまっそうになった。何の因果か、冷房の効いた喫茶店で、初対面の、それも魅力的な女の子と向かい合って坐っていることの不思議。彼女の方もいざ会ってみると何から切り出したらいいのか分からない風だった。電話の時の一種の興奮状態は冷めていた。

彼女はアイスコーヒーをブラックで飲んだ。僕はガムシロップを底に沈ませ、ミルクを注いだ。それを掻き回さずに飲む。高いだけあって、ちゃんとした喫茶店のアイスコーヒーは美味かった。ひとまず喉を潤すと、ようやく人心地ついたというように、彼女はおもむろにシヨルダーバッグを開け、一冊のかなり遣い込んだと思われる大学ノートと、クレヨンで目茶苦茶に塗りたくられたラベルの挟まったカセットテープを一本取り出した。それをテーブルに重ねて置くと僕の方へ差し向けた。それが何であるかはもちろんすぐに分かった。それが久坂の最も大切な遺品であると思うと、僕はやはり

戦慄せずにはいられなかった。それを軽々しく手に取ることは出来なかったし、触れることさえ何か憚られるような気がした。

「いや、その前に、詳しい事情というか状況を聞かせてもらえないかな」と僕は言った。「もちろん、差し障りがない範囲でいいんだけど」

財津美耶子はひとつ深呼吸すると順を追って話し始めた。最初は途切れ途切れに、そんな事はどうでもいいという感じで。聞いている僕の方もだんだんかたくなってきた。二人とも午後の倦怠感に落ち込んでしまったようだった。冷房が効き過ぎているせいかも知れない。しかし次第に彼女の話し方には熱が入ってきて、舌も滑らかになった。頬にも赤身が射してきた。血の巡りが良くなってきた僕もいつの間にか彼女の話引き込まれていた。ケーキと紅茶を追加し、結局僕らは三時間はゆうにその喫茶店にいた。

久坂がどういっわけで寸又峽に行ったのかは不明である。最初から自殺しようとしていたのか、それともたまたま旅行に行った先に吊り橋があり、発作的に自殺したのかは判らない。いろいろな状況から推測すれば、おそらく後者ではないかというのが美耶子の考えであった。久坂は自宅の近辺をよく散歩することはあっても、好んで旅行に出る質ではなかった。風光明媚な溪谷と久坂の取り合わせはどうもそぐわない。都市の空間においても、自然の中においても、久坂の肖像はしっくり馴染まない。大学一年目は学校へもちゃんと通っていた。精神科のカウンセリングも受けていたという。それが二年生になると登校しなくなった。春から初夏にかけて部屋に閉じ籠もっていることが多くなった。そして六月、ふいと旅に出た。しばらく旅行してくと家族に言い残している。母親は、学校へも行かず部屋に閉じ籠もりきりになっているくらいなら外の空気を吸ってきた方がいいと、彼を快く送り出した。寸又峽までの足取りは判らない。六月十一日の昼頃、つまり亡くなる二日前、とにかく彼は寸又峽の温泉街にふらっと現れた。そして温泉街のほぼ真ん

中にある旅館としては中堅のR旅館にその日から泊まっていた。暇な学生の独り旅ということで、最初は宿の者も不審には思わなかった。しかし元気がなさそうに見えても湯治とは思えず、かといって登山が目的でもなく、話し掛けてもあまり反応がない彼を何となく危ぶんではいたらしい。もっともこれはあとでは何とでも思えてくるだけで、実際は普通の旅行者とさして変わりなかった筈だ。二日目の早朝、まだ夜が明けないうちに彼は朝風呂に入り、散歩に出掛けた。朝食の準備に来た賄い婦が目撃している。まだ眠っている温泉街を抜け、寸又峡プロムナードと呼ばれるハイキングコースへ出る。そのメインが「夢の吊り橋」である。真夏でもひんやりとした（たぶんねと彼女は言った）薄暗いトンネルを潜ると二手に分かれており、右に行けば吊り橋、左へ行くとコンクリートの飛龍橋と云う立派な橋に出る。二つの道は展望台の手前で合流している。吊り橋は一方通行である。したがって左のルートを探った場合、帰りも同じ道を引き返してくることになる。右へ曲がると急な下り坂が続いていて、その先に「夢の吊り橋」がある。美耶子の細くて長いやや角張った指が、テーブルの上に広げられた観光マップの道筋を辿る。その数分前、おそらく朝日を背に浴びた久坂は、朝の新鮮な空気を吸いながら右のルートを歩いて行った筈である。吊り橋に立ち、彼が何を思ったかは知れない。吊り橋の上から黒い影が落ちていくのを監視員が目撃していた。この辺りは自然観測教育林になっていて、県の職員がその日最初の巡回に出るところだった。橋の上に人が立っているのを見ていたわけではない。目の端に何かがよぎり、見ると黒い物体が川面に落下していった。それは鳥ではないだろう。橋の下を流れる大間川は、その先で寸又川と合流し大間ダムに注いでいる。初動が早かったとはいえ、搜索は難航した。見間違いではないのか。もちろん小さな温泉郷は大騒ぎになっていた。駐在所の巡査が各旅館を廻った。R旅館の客の中に、朝食の時間を過ぎても姿を見せない独り旅の若者がいた。そして昼過ぎ。若い男性の遺体がダムの手前で揚がった。身元を示すものは何も身につけていない。

R 旅館の女将が引つ張り出され、それを確認した。

財津美耶子はその日たまたま家にいた。学校をさぼって、家で芝居の稽古をしていたのだという。呼び鈴が鳴る。玄関を開けると、真つ青な顔をした久坂の母親が立っていた。「あの子が死んだ」とやけに冷静に母親は言った。しかし歯の根は合っていないかつたし、目は虚ろだった。最初は何を言っているのか解からなかった。だが次の瞬間彼女の身体は全身凍り付いていた。枯れ枝がぼきつと折れるように母親が玄関の三和土に崩れる。美耶子の身体も折り重なって崩れる。どれくらいそうしていたか分からない、と彼女は言った。先に立ち上がったのは彼女の方で、父親の勤め先に電話したのも彼女なら、妹への書き置きを書いたのも彼女だった。そして取るものも取り敢えず二人は寸又峽に向かった。

「それからの事はお話するまでもないですよね」と美耶子は言った。「……とにかく大変でした、警察に行ったり、葬儀の事とか、気が狂いそうになりました、いえ、神経は切れていたんだと思います、どさくさに紛れていただけで。遺体（見るも無残でした……）は解剖され、静岡市で火葬されました。……わたしが最期に見たのは、ちょうど旅行に出掛ける時で、駅前道で擦れ違っただけですけれど、珍しく旅行鞆なんかぶら下げていますから、からかい半分に声を掛けたのが最期でした。その時の、曖昧に頷いた笑顔はきつと一生忘れられないでしょう。軽く手を挙げて去っていったうしろ姿がやけに寂しそうに見えたのは、あとから思うことだからでしょうか」

警察は自殺と断定した。他殺ということとはまず考えられない。久坂が泊まっていた部屋は、起きがけに朝風呂に入り、朝飯前にちよつと散歩してくるといった風に残されていたという。テーブルの上には一冊の大学ノートが無造作に置かれてあったが、自殺を仄めかすようなことは書かれていなかった。ボストンバッグの中から遺書が出てきた。しかしそれは、中学一年の誕生日から久坂は誕生日ごとに遺言状のようなものを書いていて、それをいつも持ち歩いて

いた。日付が証明するように、それは一目見ただけでだいぶ前に書かれたものであることが分かるものであったらしい。だから足を滑らせて落ちたのではないかという見方も出来るのだが、立ち会った者は誰もが自殺だと思ったという。いずれにしろ警察が事件として取り上げなければならぬようなものではなかったので、遺体の処理が行われた後すぐに東京に戻り、自宅で簡素な葬儀が営まれた。もちろん表向きは事故死ということになっている。

「そのノートの最後のページを見て下さい」と美耶子は言った。「内野さんなら何か判るんじゃないかと思ひまして」

(後編へ続く)

(前編) (後書き)

『夢の吊り橋』 西山正義

〔第一稿〕 第四稿 105枚〕

起筆・平成八年一月六日

再起筆・平成八年十月三十日

搁筆・平成九年一月十五日

【初出】 『日&月』 第三号・一九九七 春(平成九年三月発行)

『車中での会話』 執筆・平成九年六月二十五日

(『久坂葉子について 附・「夢の吊り橋」外伝』)

加筆訂正・平成九年七月二日

校正・平成九年七月十五日

【初出】 『日&月』 第四号・一九九七 秋(平成九年十月発行)

〔第五稿 118枚〕

平成十年十二月二十一日/平成十一年一月八日〜十日

【改稿版初出】 ウェブサイト「西向の山」平成十四年四月

(C) 1997 Nishiyama Masayoshi

(後編)

夢の吊り橋 (後編)

西山 正義

「そのノートの最後のページを見て下さい」と美耶子は言った。「内野さんなら何か判るんじゃないかと思ひまして」

彼女に言われて僕は恐る恐る久坂のノートを開いた。横書きの大学ノートを縦書きに使っている。ペン先の細い黒の万年筆で書かれた文字は端正であるが神経質そうな筆跡で、細かい文字がぎっしり詰まっていた。あと数ページを残して文章は途切れていて、そのあとに数行空いて、やや大きめの乱れた文字でこう書かれてあった。

橋の下で 滝の下で 暗闇の中で はじける

言ってみればこれが久坂の絶筆である。「暗闇の中で はじける」というのは確かに僕が中学時代に作った『暗闇の中で』という曲のコーダー部分のフレーズで、正しくは「君も僕も 暗闇の中で弾ける」というものだった。しかし「橋の下で 滝の下で」というのは思い当たる節がなかった。前の文章とは、時間的な隔たりがあるような感じで、内容は忘れてしまったが繋がりはなく、最後のページにこれだけが唐突に走り書きされていた。僕は美耶子と顔を見合わせた。そして正直な感想を言った。

「この、『暗闇の中で はじける』というのは判るけれど、『橋の下で 滝の下で』というのは何だろう。橋、滝、ときたあとに暗闇と続く繋がりがよく判らない。その溪谷には滝があるんだろうか。おそらく自殺する前の日にもその吊り橋に行ってるんだろうね。も

しそうならそれと何か関係するのも知れない。いずれにしろ僕の曲とは直接関係ないんじゃないかな。……それより僕が今ぱつと思いついたのは、三島由紀夫の小説に『豊饒の海』という四部作があつて、それは簡単に言つてしまえば主人公が輪廻転生してゆく話なんだけど、その第一巻の主人公が『又、会うぜ。きつと会う。滝の下で』という、転生のキーワードになる科白を親友に残して二十歳で夭折するんだ。それを今思い出していたところで、ほかには特に思い浮かばないな。久坂は読んでいたんだろうか。中三の頃、北原が火つけ役になつて一時期クラスで小説を読むのが流行つたんだ。それもいわゆる純文学のね。太宰とかヘッセとかはお決まりとして、三島や谷崎、坂口安吾とか、川端康成の『眠れる美女』とかと似た類。その時久坂も三島の『午後の曳航』を読んでいたのは覚えてる。でもどうか？ もし読んでたとして、それが頭にあつたのなら……」

とそこまで言いかけて、僕は恐ろしいことに気づいた。まさか僕がその親友・本多繁邦の役を演じることになるのではあるまいな。僕は言つてみれば第二巻の主人公・飯沼勲の成り損ないだが、それだけは勘弁してもらいたいと思つた。あれは恐ろしい小説で、夢も認識もついに泡のように消え、存在自体も否定されてしまうのだ。途轍も無く空虚な……、いやそれは僕の考え過ぎだろう。すでに「はじめて」しまつているのだから。単純明解だ。橋の下で弾けたのは久坂の命にほかならず、それを形而上学的に捉えようとすることは詮のないことであるばかりか、危険なことだ。僕は、自殺した久坂を恋慕いこんなに萎れている美耶子を見て、（サディスティックな見方をすれば、それはそれでぞくつとするような美しさがあつたが）、たぶん久坂にとつては妹でしかなかった（しかし大切な妹である）彼女の身を案じないわけにはいかなかった。……

その日はそれで別れた。僕はノートとカセットを預かる羽目になつた。それは久坂の魂そのものようだった。帰りの電車でも、家に帰ってからノートを開く気にはなれなかつた。ほかにどんな事

が書かれているのか気になることは気になる。しかし読んだら最後、こちらも平静では居られなくなるだろう。それが怖かった。まして肉声の入ったカセットテープなどとても聴けるものではない。預かったのはいいとして、何処に置いておけばよいか迷った。僕は結局それを神棚の脇に載せ、そのまま放置していた。

暑い夏は続いた。僕は大学一年生だ。家の車を乗り回し、あつちこつち飛び歩いていた。その頃はまだ免許を持っている者も少なくさらにいつでも自由になる車を持っていたのは僕らの周りでは武田と僕の二人ぐらいだったし、学生結婚した武田と違ってアルバイトもせず、声が掛ければ何処へでもひよいひよい出掛けて行った僕は、その数年後流行った言葉で言えばまさにみんなのアッシー君だった。軟派サークルの連中に誘われて、女の子たちと海へも何度か行った。お陰でこれでもかというくらい真っ黒に日焼けしていた。今にして思えば一九八〇年代の《青春》をそれなりに謳歌していたわけで、神棚を見上げるたびに胸が詰まることはあっても、久坂のことを考えている暇はなかった。しかし、財津美耶子の肖像は僕を捕らえて放さなかった。

二週間ほどしてまた会うことになった。電話で僕は、ノートも読んでいなければカセットもまだ聴いていないことを告げた。「そうですか」と美耶子はがっかりして言った。電話を切ったあと、やはりちゃんと向き合えないといけないなと思い、ノートとカセットを神棚から降ろし、自室の机に置いた。ノートをばらばら捲ってみる。所々拾い読みしてみると、それは日記のようなものではなく、必ずしも自己の心情などを赤裸々に綴ったものではなかった。僕は少しほっとした。読んだ本への批評や経済学の授業に対する批判など、客観性を帯びた文章も多数あり、論文の下書きなども混じっていた。一部分はアフォーリズム集のようになっていて、小説や評論からの引用がアットランダムに写されていたりした。みんな似たようなことをやっているんだと思っただが、同じ一冊の本から何か引用してこいと言われた場合、人それぞれによって引っ張ってくる処は違ってくる。

る筈で、それらを読んでいると自ずと久坂の思想が見えてくる。考
え方としては、『雑木林』のメンバー、特に北原や古川に近いもの
があて、引用句に対する久坂のコメントの中に、古川純一が雑誌で
述べていたこととそっくりな文章を目にした時、僕は初めて久坂の
死を悼み泣けてきた。何も死ぬことはないじゃないか。途中でノー
トを閉じ、しばらくぼうとしていた。カセットテープのケースを開
ける。中から曲目やデータが書き込まれたライナーノーツが出てき
た。手製のラベルとそれらを見ているとその思いは一層募ってきた。

待ち合わせ場所に現れた美耶子は、相変わらず全身黒尽くめの格
好であったが、前回とは打って変わって晴れやかな表情をしていた
ので、僕は意表を衝かれた。あたかもこれからデートでもするとい
うような錯覚に陥らせた。もう初対面ではなくなつたせいもあるだ
ろうが、それが本来の彼女の姿だつたといえる。僕が彼女を何とな
く危なつかしいと思つていたのは、久坂のこととは別に理由があ
つて、それは彼女が初対面の男の身体にも平気で触ってくるような
すぐに男に凭れるタイプの子に見えたからである。ほだされたら何
処までも行つてしまうのではないかと思えた。雑踏の中を歩き始め
ると、彼女は僕の腕を掴み寄り添ってきた。それは媚態というので
はなく、他意はないのだが、そういうタイプの女性は確かにいて、
会社にいた女の子とイメージが重なつたのはその点だったかも知れ
ない。会社の子は明らかに香水と分かる匂いを撒き散らしていたが、
美耶子からはそれとは異なる優雅な香りがした。人工的な匂いでは
い。かといつて体臭そのものでもない。街の匂いとも溶け合ってい
た。暑いさ中だというのに、べたついた感じはなく、もちろん僕は
悪い気はしないのだが、そうやってしばらくぶらぶら歩きながら、
僕は別なことを考えていた。

果たして久坂は童貞だったのか。この疑問は最初からあつた。何
故かしら童貞にしか出来ないことがあるような気がしていた。童貞
だからこそ出来ること。その一つに自殺があつた。もちろん大人だ

って自殺する。だがそれにはたいてい具体的な理由や直接的な原因があるもので、久坂のように（おそらく）そうでないような場合、童貞特有のものに思われた。むしろ子供や少年だって直接的な原因があつて自殺することはあるし、むしろその方が多いだろうが……。処女の場合はどうだろう。処女特有の感性というのは確かにある。だが処女だとか童貞だとかには実のところ何の意味もないし、逆にそうでなくなつたからといって何か意味があるわけでもない。男を知る、あるいは女を知つたからといって、それで世界が変わるわけでもない。通過してしまえばそれまでのことで、処女も童貞も薄汚いだけだ。しかし何かしら向こう側に突き抜ける力を持っている。だから久坂は童貞でなければいけないような気がしていたし、また実際そうであろうと僕は思っていた。美耶子が処女であるとは思えなかつた。もしこの二人の間に本当に何も無いのなら、ほかにも女がいるか風俗にでも行つたのであれば別だが、久坂は童貞ということになる。

言葉らしい言葉も交わさずに、ただ歩き廻っていただけだが、その散歩は充分愉しかった。彼女の身体の鼓動と熱が直に伝わってきて、僕は身体的にも心地良かった。このままずっといつまでもこうしていたいと思つたほどだ。

見晴らしのいい明るい喫茶店を選んで入つた。彼女と向き合つた時、僕は久坂のことよりも美耶子自身のことを聞きたくなつていた。しかしその前に責務を果たさなければならなかつた。僕は、浪人時代から使っている黒いシヨルダーバッグから久坂のノートとカセットテープを取り出し、「一応、ひと通り目を通しました。テープも聴きました」と言つて、それらを美耶子に返した。彼女が身を乗り出すのが分かつた。僕は何を言うべきか。息を飲んだ。一瞬しんとしてしまつた。僕はすでに十代の頃の感傷を失くしていた。だから久坂の「作品」についてどうこう言うべきことはなかつたし、それらと彼の自殺を結び付ける気もなかつた。だが、僕が感じたことを率直に言う必要はあつたらう。それは僕自身の悔恨についてだ。

「これを読んでもらえれば」と僕は言い、『雑木林』の第一号を彼女に渡した。「この春から僕らがやっている、一種のサークルの会報なんだけれど、メンバーはみんな別々の大学から集まっていて、北原なんかも加わっているんだ。それぞれが勝手なテーマで書いているから内容はまちまちで、いわゆる同人雑誌というのとも違ったりサークルといっても何か特別な活動をしているわけではないんだね。……それで、北原の書いている文学論はかなり専門的で判りづらい箇所もあるけど、久坂の考えていたらしいことと重なる部分があるんだ。それから、古川っていうL大の社会学科に行っているやつが書いた評論には、もっと端的に久坂がめざしていたような世界観が展開されていて、実はこの文章は古川君独特の言い回しもあって非常に刺激的なというより挑発的な内容で、（ただしそれは挑発的ではあるけど、決して大声で叫んではないんだ。僕らはアジったりはしないからね）、ほかの連中が研究発表的なものとかコラムやエッセイみたいなものを載せているのに比べて、僕には結構衝撃的だったんだ。だからどうだというわけではないんだけどね、久坂のノートを読んで僕が感じたのは、久坂の考えがどうのこうのということではなくて、どうして僕らは擦れ違ってしまったんだということなんだ。高校の時なんかかしていればという。やっぱり僕なんだよ。あるいは北原が……。死ぬことはなかった」

その言葉を初めて口にした途端、僕は思わず泣けてきそうになった。それは美耶子の白い頬を伝う涙を目にしたせいばかりではなかった。

「いや何も、僕や北原なら、彼を救えたかも知れないなどということや言っているのではないんだ。人を救うなんて、そんな僭越なこととは言えない。どう言ったらいいのかわからないけれど、でもきつと僕らでは駄目だったんだと思う。もし『雑木林』の存在を彼が知ったとしても、加わるとは思えない。僕らは縦にも横にもいわゆる組織的な繋がりというものを廃して、自分たちにレットルを貼ったり、お互いに束縛することのないようにしているし、来るものは

拒まないけれども、半年もやっていけばそれなりにグループみたいなものも形成されてきて、久坂は根本的にそういうことには馴染めなかったんだと思う。成田みたいなキャラクターこそ必要で、その成田ですら、いや、そういうことも違うんだろう、とにかく……」

僕は煙草をやたらに吹かしていた。そして残りのアイスコーヒを一気に飲み干した。氷が溶けて薄くなっていた。重苦しい時間が流れた。始めのうち彼女は雑誌をばらばら捲っていただけだったが、僕がよそ見をしているうちに仔細に読み始めていた。悪戯っぽい目でしきりに僕を見るので、何を讀んでいるのだろうと覗くと僕の文章だったので、「僕のは今ここで読まないでよ、恥ずかしいじゃない」と身を乗り出して言うと、ようやく座が和んだ。

喫茶店を出ると、黄昏時の街をまた歩き始めた。何処へ行く当てもなかった。僕は後味の悪い気分になっていた。美耶子に会う前までは、確かに自分の悔恨について考えていた。しかしきょう最初に彼女を見た時、僕の心境は変わっていて、本当はもつと別のことを言うつもりだったのに。

それから美耶子とは頻繁に会った。その都度彼女は久坂の遺品を持って来ては、僕にいろいろ意見を求めた。興味を引かれるものもあつたが、何の感想もないものもあつた。だんだん僕は美耶子自身のことを心配するようになった。彼女は時々妙な反応をしたし、表情が瞬間的に著しく変わることがあつた。久坂のことはもういい。自殺したからといって、勝ちとか負けとかというのではない。それは選んだに過ぎない。彼女がいつまでもそれを引きずっているいることの方が問題だ。僕は再三そのことを彼女に言った。忘れることは出来ないだろうから、無理して忘れることはない。でも、君は生きているんだ。紛れもなく。もちろん僕も成田も北原もね。前進するにしても後退するにしても、止まっていることは出来ない。そんな分別臭いことも言った。久坂のことは本当のところ僕にもよく判らない。深い付き合いがあつたわけでもない。僕はつとめてほかの話題を探した。僕はいい加減うんざりもしてきたが、僕に会っ

て話をする事で彼女の気が済むのならそれでいいと思っていたし、連絡があるという事は彼女が馬鹿な考えを起こしていない証拠であるうと。それに第一、僕は彼女自身することに興味があったし、彼女がやっているという演劇にも興味があった。

残暑もおさまり、秋が深くなるにつれ、本来の彼女の姿、それはどちらかというと明るく天真爛漫な、ある部分では軽薄なところもある彼女の素顔を見せることが多くなってきた。おそらく僕と会っている時以外はそうして生活しているであろう自然な姿。久坂に縁のある僕がいけないのかも知れない。しかしそれだけたびたび会っていれば、過去だけにしか繋がりのない話題はだんだんネタが尽き、僕が心配していたような方向へは進まず、自然に久坂の話をする時間は減っていき、全くその名前が出ないこともあった。彼女に付き合って、暗黒舞踏なるものを観に行ったり、美術館巡りをしたりもした。『雑木林』の会合はその付属高出身者が多かった関係でL大とS大で交互に開いていたのだが、L大からはママシが出るという獣道を抜けて行くと、ひと山隔てたC大にも簡単に（ではないが）行けたので、彼女のいる教室へ潜り込みに行ったりもした。大学一、二年の頃、武田とともに僕はあたかもゲリラのようにあっちこっちの大学に出入りしていたので、（二人とも夜学だったので都合が良かった）、そんなことはわけないことだった。僕らは次第に、何のことはない、男子学生と女子学生がデートしているような具合になっていった。しかし僕の方から彼女に手を出すということはなかった。近親相姦のように何か冒しがたいものが横たわっていて、常に一歩距離を置きたいという気持ちがあったからだが、翻ってみればそれは、彼女の《女性》性からの本能的な防御の姿勢だったかも知れない。

僕は自分や友人のことばかり喋った。それから『雑木林』のメンバーといつも話しているようなことを喋った。彼女も自分のことを語るようになった。男関係についてもあけすけに。やはり想像していた通り、彼女は性に対しては奔放で、というより主体性というも

のがあまりなく、久坂一筋だった中学までとは異なり、高校に入っただあたりから距離を置くようになり（それは久坂がつれないからでもあったが）、学校の演劇部ではない外の劇団に入ることによって、より広い世界を知ると同時に大人の誘惑も多くなり、誘われるままに男と寝ていたという。久坂は知っていたのかと言うと、たぶんと彼女は答えた。彼への当てつけがないわけではないが、よっぽど生理的に嫌いな人でない限り、ノンとは言えないのよと彼女は言った。僕は苦笑して聞いているしかない。で、今は特定に付き合っている人はいるのと訊くと、いいえ、あなただけよ、と流し目で言う。おい、久坂、どうにかしてくれこの女と思っただが、僕は彼女との逢瀬をやめることは出来なかった。

しかしそろそろ終止符を打たねばならない時がきた。男と女の間にも友情は成立する、と僕は確信していたし、今でもそう思っている。友人の細君である大沢真弓さんや安西佳子さんとは当然としても、石井宏美などとはそういう関係にあった。しかし、美耶子との間柄は長く続けるにはあまりにも不自然だった。芝居の稽古を再開しはじめた彼女を見ていて、すでにそういう思いが徐々に湧き上がっていたのだが、それは彼女の演技を初めて観に行った時に訪れた。

もう十一月になっていた。学園祭もおおかた終わった頃。それはさまざまなパフォーマンスをオムニバス形式に集めた一種のイベントで、メインはカオスというインディーズ・シーンではカリスマ的存在のロック・バンドだった。会場に入る前からすでに異様な雰囲気包まれていた。まるで黒弥撒のようなイベントで、一度中に入るとすべて終わるまで出られない仕組みになっていた。音楽も効果音も舞台装置も排して、照明も白熱灯のスポットのみの中で、真っ白に全身を塗った素っ裸の男女数人が踊る、というより蠢くといった方がいいような舞踏があり、詩の朗読のようなものがあつたり、エレキ・ギターを目茶苦茶に弾きまくり最後には失神してしまうのやらがあり、美耶子は魔法使いのお婆さんが着るような黒衣を纏ってソロでパントマイムを踊った。踊りそのものはエロティックなも

のではなかったが、顔の表情はひどくエロティックだった。驚いたことに、会場には武田行雄と城山晃も来ていて、武田はカオスのリーダーと知り合いで、このステージを最後にバンドを去ることになったギターリストに代わって、その後釜に城山が入ることになっているというのだ。さらに驚いたことには、美耶子の踊りで使われていた曲は城山が創ったものだという。

関係者だけの打ち上げに僕も参加した。どうやって街を歩くんかというような格好をしたファンの女の子が乱入してきたり、とにかくへんてこりんな連中ばかりだったが、やはりカオスのファンだという美耶子が、その中で生き活きと泳ぎ回っているのを見ているうちに、もういいだろうという気がしてきたのだった。

騒ぎは明け方まで続いた。ようやくお開きになり、酒の飲めない僕と武田が、機材を積んだ車を運転して帰ることになった。武田がカオスのハッチバック車を運転し、僕が劇団のワゴンに乗り込んだ。そしてそれぞれ別々の方角へ帰っていった。へべれけに酔っぱらったもう一人の劇団員の自宅に車を置く前に、美耶子を家まで送り届けた。別れ際の彼女の笑顔にもそのことが書かれてあった。朝焼けに照らされてそれは美しかった。今まで見た中で最高の笑顔だった。「さようなら」と彼女は言った。「さようなら」と僕も応えた。

その瞬間、それまで思っていたこととは裏腹に、僕は堪らない寂寥感に襲われたが、それを振り払うようにアクセルを一気に踏み込んだ。

案の定、彼女からの連絡はしばらく途絶えた。それまでも僕の方から電話をすることはなかったのですが、僕からはどうすることも出来なかった。でも、何か忘れていることがある、何か物足りないという気持ちが残っていた。それが何だったのかが解かったのは、やはり彼女からの電話だった。

「内野さん、最後にもう一度だけ会ってもらえますか？」美耶子は言った。「まだ完全に吹っ切れたわけではないんですけど、自分の

気持ちを確認しに行きたいんです。そして一応ピリオドを打ちたいのです。寸又峡に付き合つて下さい。内野さんにも『夢の吊り橋』を見てもらいたいの。いえ誤解しないでね、もう謎解きはいいのよ」「オーケー、解かった。僕も何か忘れていることがあると思つていたんだ。それが今やっと解かつたよ。一度は行つてみたいと思つていたし、それに、やっぱり僕もその『夢の吊り橋』とやらを見ておくべきだろうしね」

「ありがとう」

「でもさあ、心中しようなんていうのはご免だぜ」と僕は冗談を言った。

「あら、それはいい考えかも知れないわね」彼女は笑いながら言った。「びつくりするでしょうね」

「誰が？」

「誰がつて、みんなよ」

「いや、一番驚くのは久坂だろうね」

彼女がOKしてくれたので、僕はその小旅行に北原広志と成田倫太郎を誘うことにした。どうして彼らを誘つたのか。成田も現場には行ったことがないというし、当然彼らにも行く権利があつたからなのだが、もし僕と美耶子が恋人同士ならそうはしなかつたらう。もう僕らの微妙な関係は終わつて、普通の友達として付き合えると思つたからだ。

それが十二年前のちょうど今頃で、翌週四人の都合が空いた十二月半ばの平日、僕らは寸又峡に向けて車を走らせていたのだつた。

*

電気屋さんが運転するバスは、東名高速を静岡インターで降りた。いったん市内に戻り、国道三六二号線に入った。この辺りの風景は見覚えがなかつた。あの時は手前の清水インターで降り、国道一号

線から三六二号線に入ったのだったかも知れない。川沿いにそつて行くと、次第に景色は山の風景になってゆく。黒俣川が藁科川に注ぐ八幡を過ぎると、本格的な峠道になる。確かに見覚えのある風景になってきた。

そつだ、あの時、この道を走りながら、助手席の北原とこんな会話をしたのだった。

「久坂という名前は、どうして早死にするんだろうね」

と、僕が言うと、「え、どうということ？」というように北原は僕を見て、足を組み直しす。後ろからは成田の運転するスバル・レオーナが追いかけてくる。その助手席には財津美耶子が坐っている。ウインドーを開けているのだから、長い髪が風に靡いているのがバツク・ミラー越しに見える。ちょうど急カーブにさしかかり、僕はクラッチを踏み、ギアを落とす。そしてこつ続けた筈だ。

「久坂葉子つて知ってる？」

「作家でしょ。たしか、戦後まもなくくらいに、芥川賞の候補に最年少でなつたとかいう人じゃないの」

「お、さすが国文科」

「そつちこそ、よくそんなマイナーな作家の名前知ってるねエ。法学部生のくせに」

「いや、実はこの間、武田君から『女』つていう作品集を見せられて初めて知つたんだ。読んだことある？」

「残念ながらないんだ。関西の方、京都、いや、神戸とか芦屋とかの出身で……」

「神戸の、いいところのお嬢さん」

「そついえば夭折しているね。やっぱり自殺したんじゃないかな」

「二十一だつて。昭和二十七年の大晦日の夜に、鉄道自殺。阪急の六甲駅だつてさ」

「すごい美人だつたつていう話だけど」

「すごいかどうかは分からない。主観の問題もあるしなア。口絵に

写真が載ってるんだ。それだけじゃ本当のところどうだったかは分からないけど、まあ、美人と言っても差し支えないんじゃない。ちよつと大人びた、好奇心いっぱいのお嬢といった感じ」

「へー」

「当時、民放ラジオが放送を開始したばかりで、放送劇を書いたり、演劇にも関係していたらしいよ」

「そうなんだ」

「芥川賞の候補になった『ドミノのお告げ』っていう小説は、武田君が言うには、教養文庫の何かのアンソロジーにも入っているそうなので、読んでみる価値はあるよ」

「うん。一度読んでみたいとは思っていたんだ」

「武田氏は、『入梅』っていう短篇が好きだと言ってたけど、おれは、死を覚悟して、自殺する直前まで書いていた『幾度目かの最期』っていう手記に圧倒されたな。文字通り鬼気迫るものがあって」

「……で、だからといって、久坂政道とは関係ないだろう」

「まあ、そりゃそうだ。それに久坂葉子というのはペンネームだしね。いや、実はもう一人いるんだ。久坂というのが」

「だれ？」

「玄瑞・久坂義助。いわゆる幕末の志士というやつだね」

「ああ。好きだよ。尊皇攘夷。長州？ 薩摩？」

「長州。医家の出。そういえば、北原家は会津だったっけ」

「いや、二本松。というより、相馬に近いかな」

「久坂玄瑞は、松下村塾きつての秀才で、四天王のひとり。吉田松陰の妹婿にもなっていて、最も将来を嘱望されていた人。高杉晋作なんかも、もともと彼に誘われて松下村塾に入門しているんだ。奇才という点でも、高杉と双壁だったらしい。ただ、高杉が血の気が多くて言動が派手だったのに対して、冷静沈着だったらしいんだ。どちらかと言うと文学青年タイプで。ところが、実際の行動は逆になっちゃって、久坂玄瑞の方が先に突っ走っちゃったんだ。長州藩

の中でも最右翼というのか、要するに攘夷の急進派で、文久三年だ

つたと思うけど、（なんだかも懐かしいな日本史も……）、八月十八日の政変で京都から追放されて、例の池田屋事件で完全に火がついちまったんだ。で、蛤御門の変で壮烈な最期を遂げている。戦場で孤立無援になって、最期は自刃している」

「いくつだったの？」

「数えて二十五。今風にいえば二十四か、もしかしたら二十三だったかも知れない。幕末の志士の中ではそんなに目立つ人じゃないんだけど、おれは何故か魅かれてしまうんだ。普段から血気はやる人より、普段抑えている人の方が、いざとなると、案外トリッキーな行動に出るもんなんだ。テロリストなんかにしてもそうだよ」

「それはあり得るね。内野氏みたいに」

「まあ、まあ。……それにしてもさア、明治政府の弱いところは、というよりその後の日本が駄目なのは、高杉の使い走りでしかなかった伊藤博文なんかが最初の総理になっていたり、久坂や高杉なんかより年上だけど、奇兵隊に入るまでは大した活躍していなかった山県有朋なんか軍閥の鬼になっているようじゃね。吉田松陰はともかく、高杉も坂本竜馬もいないんだから」

「確かにそうかもね」

「個人的には、伊藤博文なんかも、伊藤俊輔の頃は好きなんだけどねエ。何となくおれの境遇と似ててさ。かなり人を伐っているんだもちろん、おれは伐ったことないよ。最期はハルピンで自分も討たれちゃったけど、おッ、そっちすごい崖だなあ」

「うん。実はさつきからこっち怖かったりして」

「しまった。飛ばし過ぎたかな。後ろがついて来ないや。……ところで、何の話だったっけ」

「え、だから、久坂という名前について」

「あッそうだった」

「久坂という姓は何故に天折するか」

「まあ、たまたまその二人が思い浮かんだだけで、ほかには知らないし、別に深い意味はないんだ。そう言っちゃったら日本中の久坂

さんに悪いしね。……だださア、久坂玄瑞は文字通り本当に討ち死にしたわけだけど、久坂葉子にしろ、あの久坂にしても、討ち死にしたようなもんじゃないのかなあ」

いや、そう思いたいんだ、と僕はその時心の中で呟いていた筈なのである。……

久能尾から洗沢にかけての峠はかなりの難所である。右へ左に小刻みに旋回する。座席が高い分よけいに崖がせまっているように見える。乗用車ならいざ知らず、素人ドライバーの運転するマイクロバスでは辛かった。途中適当なところで昼食をとる筈が、ここまで来てしまつともう何も無い。一気に目的地に行ってしまうしかないみんな無口になってきた。僕も感傷に浸っていられなくなるくらい気分が悪くなってきた。毎日何十キロと1BOXのバンを運転している筈の空調屋の工事主任ですら、本当に吐きそうだと言いつ出したので、退避帯のある所でバスを止め、みんな外へ出た。「ひでエところ连接到来られたものだ」建具屋が言った。向かい側に材木などが無造作に置かれた空き地があり、そこでみんな放尿しはじめた。数十人の男どもがてんでの方向を向きながら一斉に立ちションしている図というのは可笑しかった。山の神様は女だ。小便をかけられたのでは堪らないだろうが、少しは目の保養になったろう、などと馬鹿なことを思ったりする。

小長井で国道を外れて、さらに北上する。「おう、やっと着いたか。メシ食うところないか。メシだメシ」金物屋が言う。「寸又峡温泉へようこそ」と書かれた看板のすぐうしろに県営駐車場があった。そこへバスを乗り入れ、向かいにある蕎麦屋に入ろうとしたが、混んでいて人数分の席が無いというので、結局一行が泊まるY旅館が経営する夜はスナックになる怪しげな店で食事した。もう食えれば何でもいいという感じであったが、料理はまともなものが出てきた。

- - あの時僕ら四人が入った蕎麦屋はどこだったろう。やはり昼過ぎに着いたのだ。たぶんさっきの蕎麦屋だったと思うのだが、改装

されて山の蕎麦屋らしい雰囲気を醸し出した店構えになっていた。

腹がいっぱいになりようやく落ち着くと、みんな元気になり、旅館に荷物を預け散策に出掛ける。せっかくだから「夢の吊り橋」とやらを渡ってみようということになり、一部「美女づくりの湯」という県営の露天風呂に入りに行った数人を除き、土産物屋をひやかしつつ、寸又峡プロムナードと名付けられたハイキングコースへ向かった。僕は少し遅れて厨房屋の社長と歩く。

一般車両通行止めのゲートの所で、環境美化運動のための募金を呼び掛けていた。一種の入場料のような形で百円寄付すると、吊り橋の絵葉書とイラストマップをくれた。昔はこんなのあったかしらと思った。きょうは日曜日なので近県からの日帰りの行楽客も多かったが、あの日は観光客らしいのはほとんどいなかった。

「これで今年も終わりか。一年なんて早いもんだなあ」

「そうですね」

「看板屋さんの景気はどうなのよ」

「全然ダメですよ。相変わらずひどいもんです」

「どこいってもいい話きかんのう」

仕事の話、要するに共通のお客に対する愚痴を言い合いながら歩いた。穏やかな天気だった。森林の匂いを胸いっぱい吸い込む。僕の心はいい意味で空白になっていた。だから話好きの社長のお喋りもつるさいとは思わなかった。

栗がやけに大きな音を立てて反響するトンネルを抜ける。前の方の集団は騒がしい。吊り橋がはるか下の方に見えてきた。「まだあんなにあるのかよ」還暦を過ぎた厨房屋の社長は溜め息をつき、「俺はもういいや。先に帰って、湯にでも浸かってるわ」と言って引き返してしまった。

そこは何も変わっていないかった。そこから橋の袂まで続く急な下り坂を、僕は一步一步踏み締めるようにして下った。

*

吊り橋の袂に立った時、僕は北原と顔を見合わせ、渡るのはやめようかと思った。美耶子は薔薇の花束を持って来ていた。前の日に買っておいたのを、朝から後部座席に置き放しだったので、何となく萎れているように見えた。「政道さんに薔薇は似合わないかしら。もっと相応しい花はないかしらと思っただけ……。」と美耶子は恥ずかしげに言った。「でも、黄色の薔薇ならいいんじゃないの」と僕は言った。実際それくらい派手な花束の方がいいような気がした。

彼女は橋の真ん中から花束を投げるつもりでいた。しかしその橋は、そんな動作をするには危ないように思えた。男たちの方が怯んでいた。むしろ彼女は渡ると言うので、僕が先頭に立ち、次に美耶子、そして北原、成田の順で足を踏み出した。最初、間隔を詰めて渡りはじめたので、橋は大きく揺れた。四人のタイミングが合わなかった。

「おい、ちょっとタンマ、タンマ。止まってよ。もっと間を空けよう。くつついているとかえって危ないよ」僕は振り向かずに行った。中間地点を過ぎた辺りで、黒い影が谷底へ落ちてゆくのが分かった。僕は一瞬ぎくつとした。まさか……。止まる方が怖かったし、手すりのロープが低い位置にあるため上体をうまく支えられず振り向けなかった。僕が渡り切ると、美耶子、北原、成田と次々になだれ込んできた。しばらくそこにへたりこんでいた。

立ち上がる。ところがその先がまた大変で、もの凄く急な登り坂が延々と続いているのだ。僕らは息を切らせながら登った。そしてようやく少しなだらかな所に出て、ひと息つく。それを過ぎると展望台へ続くアスファルトの道にぶつかる。路端にベンチが一つ置いてあった。そこでひと休みした。成田などは大の字に寝ころんだ。僕は呼吸を整えると、煙草に火を点けながら、こう言った。

「ひよつとしたら、本当は事故だったのかもね」

成田も頷き、「こりゃあ怖いわ。ちょっとバランス崩したら真っ

逆さまだもの」と言った。久坂が朝日に向かって横向きに立っている姿が浮かんだ。しかしその姿勢だと、片方に重心が傾き頭から落ちてゆきそうに思えた。「別にどっちでもいいけど、事故のような気もしてきた」と僕はもう一度言った。

今、車止めのゲートでもらった案内図の説明を見ると、吊り橋は、長さ九十メートル、高さ八メートルで、渡る時は十メートルくらい先に視線を置き、揺れが上がった時に足を下ろすとタイミングよく渡れると書いてある。あの時は、橋はおろか周辺に僕ら四人しかおらず、谷間に取り残されたようで、よけい恐怖心が増していたのかも知れない。今こうしてみんなでわいわい言いながら渡ってみると、そんなに大袈裟な代物ではない。途中から引き返してくるオバサン達がいて、そこまで行つたのなら渡ってしまった方がいいのと言いたくなる。この橋を一方通行にしているのは、たいしたことはないと言つても擦れ違ふのは至難の技なのだから。

舗装された道は、飛龍橋で再び大間川を渡ると、婉曲しながら続いている。トンネルの手前で来た道に合流し、一周一時間半ほどのハイキングコースは終わる。温泉街をひと通り見物する。久坂が泊まっていたというR旅館を外から眺め、駐車場に戻った。だいぶ寒くなってきた。時刻は四時を回っていた。もう間もなく日が暮れる。「さて、どうしようか」と僕は言った。このまま真っ直ぐ帰るのは惜しいような気がした。成田はすでに車にキーを差し込んでいた。「わたし、泊まっていこうかしら。日帰りのつもりだったけど、やっぱり泊まっていきたくなっちゃった」美耶子は言った。「みなさんどうですか？ あ、わたしきょうお金持ちなんですよ。相部屋でもよければ宿代わたし持ちますから」

それはいい考えだと僕は思った。成田は用事があるので帰ると言った。露天風呂があるみたいだから温泉だけでも入っていかないと誘ったが、あんまりゆつくりしてはられないんだと言う。「折角だから泊まっていきたいのは山々だけど、おれも明日があるしな

……」と、さすがに北原は温泉に未練があるようだったが、「リントクが帰ると言うなら一緒に乗って帰るわ」ということになった。僕と美耶子は、傍目には出来ているとしか見えなかった。二人が余計な気を回しているような気がして、誤解するな、そんなんじゃないんだと言いたくなつたが、まあいいやと思ひ、東京に帰って行く二人を見送つた。美耶子が手を振る。こうして並んで見送る姿はどう見ても恋人同士だった。成田の車の白いボディが木立に消えると、僕は彼女に言つた。

「なんか、あいつら誤解してないかなア」

「迷惑でした？」

「いや。折角ここまで来たんだから温泉に入らなきゃ勿体ないよ」

まず宿を決める。どこでも空いてそうだった。

「R旅館だけはやめとこうね」僕は言つた。

「あら、そう言われると泊まりたくなるわねエ」

「いや、やめとこオ」

「冗談よ、冗談」

宿が決まると美耶子を部屋に待たせ、僕は、県営駐車場に停めたままになつていた車を取りに行つた。そして彼女の荷物と、いつも持ち歩いているバッグだけ持つて部屋に入つた。彼女はすでに浴衣に着替えていた。初めて見る浴衣姿。こちらの方が気恥ずかしくなつてしまつたが、僕も浴衣に着替え、彼女の煎れてくれたお茶（さすがに静岡だけあつてお土産用の上質のお茶だった）を飲み、菓子を一いつまんで、さっそく湯に入つた。誰もいない岩風呂に一人で浸かっていると、やっぱりあれは事故だつたんではないかと思ひてきた。温泉に入って幸せな気分になつたあとで、自殺なんかしようと思つたろうか。そうとも限らないか。などと考へているそばから、彼女が湯を浴びている姿が目の前にちらついた。

予約もなく、時間も遅かつたので食事は外でということであつたが、何とか用意出来るということになり、食事は部屋でした。僕はまったくの下戸で、彼女も見掛けによらずあまり飲める方ではな

ったが、ビールを一本だけ取って、一応乾杯した。たしかこう言ったのだ。「君の未来に乾杯！」　今にして思えば、よくぞそんな気障を科白を言えたものだと思うが、あの場では、それは冗談でも洒落でもましてや口説き文句でもなかった。

食事が済むと、食器を片付けるのと入れ違いに蒲団を敷きにきた。二組の蒲団はぴったり並べて敷かれた。賄いの人が出ていくのを見計らって、僕は笑ってそれを引き離れた。「別に構わないわよ」と美耶子は言った。「まあ、一応ね」と僕は言い、少しだけずらした。二十センチほどの隙間。それは微妙な距離といえる。

二人とも無口になっていた。しかし、それは急にお互いを意識しはじめたというのではなく、単に一日の疲れが出てくる頃だったからに過ぎない。温泉旅館に来てまでテレビはつきたくなかった。だがあまりにも手持ち無沙汰だったので、テレビのスイッチをひねった。ニュースは終わっていた。ヴァラエティ番組やドラマを見ても仕様がな。彼女も興味を示さなかった。しばらく教育テレビのクラシックのコンサート中継を流していたが、すぐに消した。本を読んでも身に入らない。何だかだるい。もう一度湯に浸かり、蒲団の上に乗こる。「ちゃんと寝ないと風邪ひくわよ」と肩を揺すられ起こされるまで、僕はそのまま眠っていたらしい。見上げるとかみ込んだ彼女の顔が間近にあった。僕は一瞬、そのまま彼女を蒲団の中へ引きずり込もうかと思ったが、力が出なかった。「うん」と言って蒲団に潜り込み、本格的に寝てしまった。

夜中に一度目が醒めた。しかし、お茶を飲み、煙草を喫い、歯を磨き、ひと風呂浴びて、そしてまた寝た。彼女も静かな寝息を立てて眠っていた。二人とも疲れていたのだ。

翌日、朝風呂に入り、食事をし、チェックアウトを済ませ、車を無料の県営駐車場に停めると、もう一度寸又峽を美耶子と巡った。温泉街の外周には、ほかに「外森山ハイキングコース」とか「グリーンシャワールード」とかそれぞれ名前の付いた一週一時間程度の散歩コースがある。グリーンシャワールードからは朝日岳の登山

道へ向かう道が延びていて、そこにも吊り橋が懸かっている。夢の吊り橋とは大間ダムを挟んだ下流にあたる。その橋は「愛のさんなみ（猿並）橋」という。一体、これらの名称は誰が名付けるのか。それらを隈なくそぞろ歩いているとすぐに昼になった。充分眠ったお蔭で僕は晴々とした気分で、例のイベントでのパフォーマンスの感想を述べたり、カオスというバンドについて詳しく訊いたり、城山や武田の噂話で盛り上がったたり、音楽や舞踏の話をした。

帰りは大井川に沿って別ルートを辿った。行きの峠道とは異なり、国道は比較的なだらかで、大井川鉄道と平行して走る部分もあった。金谷を抜け、焼津市に入る。途中、滝を見に行ったり、公園に寄りたりしていたので、焼津インターから東名にのった時は、すでにとつぷりと暮れていた。しかしあとには帰るだけである。の、筈であった。ところが大井松田から渋滞しはじめ、伊勢原バス停あたりで完全に止まってしまった。ラジオをつける。横浜でトレーラーや大型トラックを含む車七台の玉突き事故が発生していた。このまま進んでも海老名SAは満杯だろう。僕は厚木で降り、二四六に迂回した。それで、ロイヤルホストだったかデニーズだったかに入り、食事をした。街はクリスマス気分でも混んでいた。年末の五日だったのかも知れない。この先たとえ空いていたとしても一般道ではそれなりに時間がかかる。僕は覚悟を決め、美味しくもないコーヒーをお替わりし、ゆっくりしていた。

いい加減いいだろうと思いい店を出た。二四六をしばらく快適に走る。そのうち沿道にモーターが連なっているのが見えてきた。いくつかやり過ごしているうちに、ほとんど無意識にハンドルを切り、狭い路地に入っていた。門を潜り、空いているガレージへ車を滑り込ませた。彼女は何も言わなかった。ハンドブレーキを引き、エンジンを切った時、僕ははじめて彼女を見た。部屋に入る。彼女は黙ってついてきた。どうしてこうなってしまったのかと思いつながら、僕は立ち尽くしていた。

「シャワー浴びてくるわ」と美耶子はこともなく言う。どうせこう

なるなら、きのうにしておくべきだった。ムードもへったくれもない。彼女と入れ替わりに僕もバスルームに消える。出てくると、彼女はバスタオルを巻いただけの姿で長い髪を丹念に梳いていた。

僕らは自然に抱き合い、接吻した。思えば接吻すら初めてであった。筋肉質の身体だった。事の間、僕らはほとんど声を発さなかった。それはまるで何かの儀式のようであった。身体を離してからもしばらく横たわっていた。煙草を喫いたくなかったが、彼女の頭から腕を抜きたくなかったので、そのままじっとしていた。しばらくたって美耶子はぽつりと言った。

「内野さんともいつかはこうなると思っていたわ」

「がっかりした？」

美耶子は首を振り、

「でも……、最長記録ね」と言った。

「なんの？」

「丸四カ月もお付き合ひしていて、何もしなかった人なんて初めてよ」

「そりやどうも。でも久坂がいるだろう。彼とは何もなかったんだらう？」

「そうだった、政道さんがいた。絶望的に何もしない人だったわね。莫迦みたい、死んじゃって。内野さんと政道さんはどことなく似たところがありますよね」

「そうかなあ、僕は彼とは性格的に違うと思うけど。むしろシニカルなところとか、見掛けなんかも北原の方が近いんじゃない。……」

「けど、少なくとも君に関しては、僕も久坂の気持ち解かるよ」

「やっぱり妹？」

「うーん、ちよつと違うな。従妹ってとこかな。……それよりさあ、どうせこうなるなら、きのうの方が良かったね。折角、温泉旅館にいたのに、間抜けだよな」

「わたしは準備していたのに、内野さんたらさっさと寝ちゃったじゃないですか」

「うん、寝ちゃったね。やっぱり疲れていたのかなあ」

もう一度僕らは抱き合った。今度はもう少しましな扱いが出来た。美耶子のはけぞり、僕は深く侵入していった。

翌朝は、切りがないので、もう何処にも寄らず、サンドイッチを車内でつまんだだけで、そのまま彼女を家まで送り届けた。

「さようなら」今度は僕の方から言った。「楽しかった。君と出会えて良かった。……もう逢わない方がいいね」

「はい。いろいろありがとうございました。感謝しています」

「元気で」

「内野さんもお元気でね」

そう言っただけ僕らは別れた。年が改まって、「生まれ変わります」と一言だけ書かれた年賀状が届いたが、それを最後に、美耶子とはそれきりになった。

*

宴会が始まった。僕は体質的にまったく酒を受け付けなかった。

ほとんど一滴も飲めないと言っても過言ではない。ひたすら料理を食べた。無理強いはされなかったが、全然口を付けないというわけにもいかず、何か月振りかきアルコールを口にしたら、一口飲んでは注がれつしたが、それでもビールをコップ一杯飲み切ってははいなかった。しかし僕にとってはすでに許容範囲を越えていたので、カラオケの番がきて、急に立ち上がったら眩暈がした。歌っている途中で朦朧としてきた。音量がいる曲だったので、血液が沸騰し一気に酔いが回ってきた。だんだん声も出なくなり、目の前が真っ暗になった。比喻ではなく。曲が終わらないうちに僕はその場に倒れていた。なんとか這い上がったが、宴会が終わるまで、隅の方で横になっていた。コンパニオンがおしほりを持ってきて、いろいろ世話を焼く。だが、僕はこのコンパニオンとかホステスだとかいうやつが苦手だった。中締めが済むと、すぐに部屋へ戻り、蒲団を被って

寝た。

十二時頃になって、やっと気分が戻ってきて眼が醒めた。三時間近く寝ていたことになる。煙草を喫いながら夜風に当たっていると、斎藤君が覗きに来た。誘われて彼の部屋に行く。最初は五、六人いたのが、一人消え、二人消え、蒲団に潜って鼾を立て始めるのやらで、下の階からは雀卓を囲む音がまだ響いていたが、午前三時を回った頃には、部屋で起きているのは斎藤君と鳥越さんと僕の三人だけになった。

二人は内装工事の現場監督で、鳥越さんは五つ六つ上だったが、斎藤君は唯一同年輩だった。いろいろ話をしていくうちに、三人とも大卒であることが判った。斎藤君とは同級生であることも判り、C大出身ということは財津美耶子とは同窓生ということになる。ゼミで一緒だった奴に馬鹿な奴がいてだとか、今年はうちのラグビー部が頑張っているだとか、野球の東都大学リーグで二部に落ちてしまったあの、駅伝がどうのアメフトがどうのという話になり、僕は非常に懐かしい気分になった。この業界では大卒は珍しかった。僕の職場には皆無だった。僕は、親を含め友達はほぼ百パーセント大卒だったが、社会に出てみると、それは意外に少数派であることが判った。今の会社に転職してそれを強く実感した。学歴差別とかそういうことではないのだが、僕らにとって普通の話題でもほかでは厭味になる。大卒であることが逆にマイナスになることもある。大学を出ていることと仕事が出来ることとは何の関係もない。鳥越さんや斎藤君と話していて、僕が日頃感じていた違和感は何だったのかがはつきりしてきた。僕らは別に高尚な話をしていただけではない。だが例えば、「学生時代」という言葉をつい口にしてしまった瞬間に、差異はすでに生じているのであって、学生とは大学生を意味するので、高卒や専門学校出の者は「学校の頃」というような言い方をする。ゼミのOB会がどうのなどということは間違っても口に来ない。

二人と話をしている、そんなことを思いながら、一方で、ここ数

日、僕は何故こうも執拗に久坂のことを思い出していたのかを考えた。自分の部屋に戻ってから、いい加減眼が冴えてしまい眠れなかった。僕の部屋のほかの人達はみな出払っていて、下階でまだ麻雀をしている。このままテツマンだろう。僕はもう一度湯に浸かりに行った。

久坂政道は十二年前に死んだ。ということは、僕は彼より十二年長く生きたことになる。だが、それが何だという思いだ。一体この十二年間に何をしてきたというのだ。確かに、二十歳以降の十二年の方が、それ以前の十二年よりはるかに《人生》と呼べるものではあつたし、欠け替えのない、目に見えない財産もそれなりに得てきたが、それは否応なしに《社会》と関わっていかざるを得なかったからで、果たして《自分自身》はどうであつたのかということだ。

先月、久し振りに北原広志から連絡があつたと思つたら、離婚したという。そのことも関係している。十二年前にいろいろなことが始まり、十二年後にはすべて終わっていた。北原は大学の後輩と六年前に結婚した。その結婚式以来、成田倫太郎とは会っていないなかつた。二十歳の誕生日に結婚した武田行雄も、二年前、三十の誕生日に離婚した。僕らはいつまでも学生気分が抜けず、二十代後半に到るまで、学生時代そのままの付き合いが続いていたが、それも三十を過ぎるとさすがに途絶えがちになってきた。それはごく自然なこと、本当はいいことなのだ。それが《成熟》というものだし。かし。

一体《大人》になるといふことはどういふことなのだろう。それが僕には未だに判らない。三十を越えても学校を卒業できない自分を発見するだけだ。僕が独身でいるのもそういふことかも知れない。とても家庭など持てそうにない。

あの財津美耶子はどうしているだろうか。生まれ変わると言つた。それからの十二年をどう生きたであろう。結婚して子供がいてもおかしくはない。幸せに暮らしているだろうか。何はともあれ、僕は

それを祈った。結局、久坂のことを思い出していたのは、自分が十全に生きていないと思えて仕様がなことの現れなのであろう。

真夜中の温泉に浸かりながら、そんなことをあれこれ思っていると、ますます眼が冴えてきてしまった。ふと、夜の「夢の吊り橋」はどうなっているのかと思った。月明かりに照らされたシルエツトが目に見えかんだ。久坂が立っている。いや、それは僕だった。美耶子が対岸で手を振っている。僕はどっちへ渡ろうとしているのか。やがてすべては闇に包まれ、そして「はじけ」た。

(了)

(後編) (後書き)

『夢の吊り橋』 西山正義

〔第一稿〕 第四稿 105枚〕

起筆・平成八年一月六日

再起筆・平成八年十月三十日

擱筆・平成九年一月十五日

【初出】 『日&月』 第三号・一九九七 春(平成九年三月発行)

『車中での会話』 執筆・平成九年六月二十五日

(『久坂葉子について 附・「夢の吊り橋」外伝』)

加筆訂正・平成九年七月二日

校正・平成九年七月十五日

【初出】 『日&月』 第四号・一九九七 秋(平成九年十月発行)

〔第五稿 118枚〕

平成十年十二月二十一日/平成十一年一月八日〜十日

【改稿版初出】 ウェブサイト「西向の山」平成十四年四月

(C) 1997 Nishiyama Masayoshi

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4655w/>

夢の吊り橋

2011年9月5日22時38分発行